川柳雜誌

麻生路郎☆主宰

Pensoj flugas trans la land-limon

The Senryu Zasshi

No.306

昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可
昭和廿七年十一月一日發行第七卷第十一號（毎月一回一日發行）
創刊大正十三年・通卷三百六号

十一月號

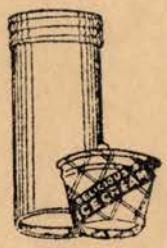
十一月号目次

昭和廿七年

題字……麻生路郎
表紙……米田三男之介

對談
鮎美・豆秋……（四）
秋夜放談……麻生路郎……（三）
川柳大学（5）……福田山雨楼……（一〇）
個性尊重……中島鉄洲……（一二）
源義經（3）……富士野鞍馬……（一〇）
今月の歴史……福田山雨楼……（一四）
偏食……木村水堂……（一三）
川柳ポスト……藤本満年……（一三）
川雑支部の改組と新設……（一三）
投句は斯うして……S・Z……（一〇）

★
不朽洞句帖……麻生路郎……（一二）
近作柳樽……麻生路郎選……（一四）
川柳塔……麻生路郎選……（六）
同舟近詠……諸家……（一二）
一路集「休暇」……高田抱逸選（一八）
「山」……石曾根民郎選
各地柳檀……（二四）
不朽洞会から……（一七）
柳界展望……（一八）
編輯局にて……（一七）

酒販用 紙コップ
食堂用 紙製品一切
アイスクリームは
堅牢で衛生的なこの容器で

特殊紙器工業株式會社
フタバカツプ株式會社
大阪市阿倍野区晴明通一丁目
電話 天下茶屋 (66) 2812 2813

秋夜放談

文化國家に就て

敗戦後の日本は肇国の一大方針として文化国家を標榜していたが、近頃では文化国家は行方不明になつている。従つて、文化の日と云うのはあつても、老人の日と一しよで、影が薄い。

国家が文化国家を標榜した手前で、どのお役所にも文化部とか文化課と云う部課が出来、会社商店は申すに及ばず工場や労働組合や医師会にまで文化部を設けたが、カンジンのものがないので成績は上らない。文化国家と云う以上文化省でも出来るのかと思つて下部組織をやつたらしいが、文化大臣も生れないのでピンボケの形だ。大臣製造の好きな吉田首相も文化大臣だけは未だに造られないところを見ると、おそらく遠うの昔に文化国家などと云うことはお忘れになつたらしい。

最近衆議院議員の総選挙があたので、立合演説を聴きに行つたが、誰一人文化のブの字も云わなかつた。

新聞に就て

近ごろの新聞は、紙が安くなつたと云つてページを殖やしたが、新聞記事が豊富になつた新聞は見当らない。スポーツや映画や洋裁や料理の記事は殖えたが、そんなものは月刊雑誌や週刊もので充分間に合うもので、日刊新聞としての徳徴を薄めても、決してプラスにはなつていないと思う。中には記事が足りなくて、必要以上に写真を入れている新聞もある。勿体ないことだと思う。

毎日々々、吉田と鳩山で持ちきりである。要点だけ知らしてくれれば充分である。国民がウンザリしているのが判らないのかと思う。ドチラが総理になつても長いことはないと、国民の方ではもう割り切つているのである。

順宮さんの結婚記事でも、しつこ過ぎると思う。御迷惑の程が察せられる。

チエのない盲選挙

議員の選挙、教育委の選挙、最高裁の選挙、と何んでもかんでも選挙制を採つている。そうすることはいかにも民主的な様だが、ソコには実情にそわないものもある。最高裁の選挙などはその尤たるものである。多くの費用をかけて、いいか悪いか判らないものに、×や○をつけさせることは滑稽を通り越している。

チンジャラと川柳人

街のチンジャラジャラも、ソロ〳〵魅力がうすれて来たらしい。チンジャラ屋もサッパリあきまへんと云うてボツ〳〵飲み屋やお好焼屋に転向しているようである。私達は特に飲み屋やお好焼を歓迎する訳ではないが、まるでチンジャラジャラに憑かれたような人達が少しでも減少することに、ほのかなよろこびを感じている。

句作にはチンジャラジャラと云う音こそしないが、チンジャラジャラのような奥行の浅いものでなく、永遠性を持つていることを、しみ〴〵と感じさせられる。トバク心理を孕んだチンジャラと精神的な思索的な句作とを比較することが既に間違いかも知れないが、川柳人で川柳以外にチンジャラ党に首を突き込んでいる人も相当にあるらしいので、いささか反省をうながしておきたい。

（麻生路郎）

談對 鮎美—豆秋

豆＝そろ〳〵始めるか。僕は鮎美さんと云うから、君は豆秋君と云えよ。鮎美さん！此の間の日曜にはよう釣れましたか。

鮎＝へえ、朝一番電車で深江の方へ舟釣りと出掛けましたが、朝のうちはがつちよ、かれい、きすと、二本の竿が忙しい位に釣れましたナ。矢張り魚もにんげんと同じように、朝食にありつこうと釣れて來まんネやろ。もう九時頃にはさつぱり釣れんようになりましてん。お晝頃舟宿へ帰つて來ましたが、それでも日頃の腕前でつしやろ、一貫二百匁おました。

豆＝ほゝう、鮎美さんは釣の方も名人の域に達してるわけだな—。鮎美さんに釣の趣味はいかにもぴつたりしてる。

鮎＝豆秋君にもパチンコもぴつたりしてるネ。

豆＝所で川柳の方でも鮎美さんにぴつたりしている句境がある。それは山雨楼さんが「椿のように紅くゆたか」と批評され、又鮎美さん自身も、「句に必ず美をプラスしたい」と云われている通り、美しい、スマートな感覚句が多い。そこで一つ鮎美さんの創作態度と云つたものを、お聞かせしてほしい。

鮎＝そうですね。若い頃の作句態度と、只今の作句態度と云うものには、何ら変りはないと思いますが、どうしても句会に出來得るだけ（毎月十回乃至十五・六回）参席して、句芯を掘り下げて行くことに斗魂を燃やしています。それは自分の色に片寄らない。丸い句芯になろう〳〵とする心にほかなりません。そして夜おそく帰つて熟睡をすると、曉三時頃にはキツト目が覚めます。それから一人こつそり起きて、「心の窓」（自称している）に靜かに坐して創り始めるのです。座禪のような恰好で……。大低そうした雜念を去つた所から生れて來るのです。

豆＝斗魂と來たね。君は美しい句を作る「善人」で、一見弱々しいと思つたら間違いで、内部では斗魂をたぎり燃やしている強靱な特殊鋼だからなア—。

鮎＝そうだよ。斗魂を淨めれば柳魂になるのだ。

豆＝柳魂と云う言葉は、川柳界で君が初めて一昨年四月の月評会で創つた言葉だが、あの時の柳魂論戰は猛烈だつたね。あれは僕が七面山氏の肉体川柳を提唱した所・君が「肉体川柳は一應うなづけるが川柳人たる柳魂はうなづけない」。それに対して亞鈍さんが、「鮎美さんの云う柳魂とはどう云うことですか、」と開き直つて、激しい論戰が展開され、その折の速記にもある通り、（鮎美、古方発言、亜鈍の応酬議長々々と豆秋を呼ぶ、騒然として筆記取れず。）と云つた塩梅で、あの論戰を錄音に取つておけばよかつたね。

鮎＝そうですね。今思い出してもお互いに熱并だつたね。あの時に云つた柳魂は、皆さんには初めての言葉だつたかも知れぬ。然し私には路郎いつぽんの生活詩を掘下げてゆく積年の句芯の叫びだつたのです。

豆＝あれ迄にも君は詩魂とか淨魂と云う言葉は使つていたが、あれから柳魂が決定版になつたわけだ。

鮎＝みんなみな落ちて流れての柳魂さ。

豆秋君の川柳パチンコマニア論をひとつ……。

豆＝パチンコ〳〵と云うが藝術の道に奥がないように、パチンコも僕みたいに皆から名人と云われる迄には、骨を削るような苦労があつたわけだ。パチンコは現代人の心理にマツチしており、源氏鶏太のサラリーマン小説が受けている狀態に似ている。何と云つても庶民リクリエーションの三十二パーセントのファンをもつて、映画に肉迫しているんだからね—。チンヂヤラ〳〵と云う、街の音楽には実に魅力があるよ。所で十九平さんの勤めている岡山縣廳に「亡國遊戯パチンコを葬れ」と「ノーモアパチンコ同盟」と云うのが出來たそうだが、どうなることか……。

鮎＝君の句にネ

街がみなパチンコ屋になるのかと思い

と云うのがあつたが、本当だね。作句当時はポツリ〳〵とあつたパチンコ屋、大したもんだ。今も見ていると、左の

ポケットに玉が四、五十個あるね。必勝法を教えてくれ。

豆＝眞劍にならなあかんよ。僕は金玉大明神と云うのを家に祭つて、朝晩拜んでいるよ。

鮎＝うエへ……。なるほど成程。奥さん何にも云やはれへんか。おうちの猫と犬とはあんたの顏見て、どんな表情してます？

豆＝そこは羊羹やキャラメルを持つて帰るので、日曜日など家でゴロ〳〵しているとき、妻が、パチンコして來なはれ、と云つた調子だ。

鮎＝なるほど成程。パチンコの行き方は君の作句態度のようだね。

豆＝作句態度と云えば僕はつとめて平言俗語の表現を心掛けている。千利久が

一より習い十を知り
十より帰るもとのその一

と茶道を教えているが、僕もとうてい十までは行かないが、頂点の十から逆もどりして、單純で、むつかしい表現をせぬように平言俗語の表現を狙つている。所でこの平言俗語の冴えと平凡とは実に紙一重の隣合せで、むつかしい道だ。この点緑雨さんの句などに大いに教えられる所がある。

折鞄靴のかゞとがありません
玩具屋の虎だけ首を振つている

此の調子だね。

鮎＝殼を破つたことを氣付いて作句される人、それを知らずに熟して落ちたことも知らずに唯々として作句されている人とには、主観客観の相違がありはしないか。と云うのは、作品に自信を持てる人、持てない人の違いともなろうか。作者の態度は依然として変らないところに浮沈がある。然し生は長し、よき指導者を得て胸襟を開かねばならぬ。私はいつも円光の下にあつて心の善をふつ〳〵と淨めている。先程の二者何れにしても各人の行き方はある。自信を持つて信念に生き、自分の川柳詩とせねばならない。その実行力として、私は先程も申述べたように積極的に生活の中からつとめて句会（作句道場）に参席し、先輩、若人の雰囲氣に飛込んで作つている。歌舞伎を見ていても、映画、演藝……。秋の徑にしづかに佇つている時も、よき子、よき夫、よき父である時も、始終は柳魂にとけている。その信念で一生をおわりたいと想いつゞけている。

豆＝一生は遲々として終らんですよ。鮎美さん。と云うのは一昨晩僕の誕生祝だと云つて柳友が五人程來てくれ、大いに飲んだ。そこで肝腎の僕の年令だが、実はいつの頃からか自分の年を見失つて皆目分らず、多分五十八才位だろうと見当をつけて定期乘車券にもそう書いていたが、一昨晩みんなに手傳つてもらい精密に僕の年を計算して見た所が、何と六十才であつたのにはビックリしたよ。然しまだまだ僕も毎晩パチンコをせんと寢られない、と云う若さを持つているから大いにやるよ。

鮎＝熟して落ちたのを知らず、の型だね。それもいゝ豆秋君のカラーがよく出ている。

私もその誕生祝の夜は招かれた一人だが、よく分る。その氣持。人生亦樂しからずやだね。円満な幸福を彷彿とする。

その噂君パチンコ屋をやり給え

どうだ一句出來ただろう。

豆＝鮎美さんあの晩又神戸終点まで乘越したのと違うか。

鮎＝鳴尾までや。一駅でも乘越したのに違いはない。どうも詩人好酒でねー。

豆＝酒では君と二人でよう傑作があつたね。

鮎＝そうや。頭に癖を私はこしらえて知らなんだり、君は眼鏡の玉をとばしてあくる日は会社を休んだね。あの電話は傑作やつたね。

豆＝そや〳〵。

鮎＝ほんとうに一生は長いね。此の先酔えば嬉しくなる二人なれば、又どこでどんな脱線があるかも知れないが、お互いに仲よう川柳の道を歩いて道草を大いにやろう。それが川柳にプラスになることならえゝやないか。

豆＝鮎美さん！

鮎＝豆秋君！

（筆記者註―この時二人はお互いにニコ〳〵として、どちらからともなく右手を出し、期せずして握手をしたのであつた。）

豆秋、鮎美（異口同音に）芝居もどきになつたなアー。

（春巣筆記）

川柳塔

兵庫県　戸倉普天

品定めちと背の低い事も言ひ
選挙戰バスにもお辞儀して通り

平塚市　木村孤浪

十日経つて新婚やつと父母の夢
せなの母三歩行かぬに笑ひ出し
女子野球あと八人は義理で撮り
二級酒でいゝと女將は目くばせし
筆不精とう〳〵退院してしまひ
「農家の皆様」ジャズ聞くどこの騒ぎかへ
さめて猶悩みつゞける酒に酔ひ
I don't know だワよでパン〳〵事が足り
そのくせに通過後工夫ゆつくりし

尼崎市　水谷鮎美

退屈へ愚問ばかりの手紙が來
風邪心地窓の外ではかくれんぼ
守銭奴の意外マリアの像を掛け

横浜市　福田山雨楼

保安隊元大佐など召し抱え
七十八大使の椅子へ座らされ
さき知れぬ身体に早い爪ののび
猫いらずかけ佛心を疑いぬ

平沼騏一郎氏を悼む

複雑怪奇居士の辞世がほしいとこ
北京へも行かれぬ世界とは狭し
出て貰いたい人が名乗らぬ総選挙
総選挙拜み倒す手まだ止めず

京都市　前山北海

東京にて

ビル建てるハンマが叩き起す朝
アベックの女男を引き廻し

ホテルにて

聖路加の赤い燈またゝく夜のしゞま

ホノル、市　内藤草一郎

仕事には出さぬ根氣を悪に出し
お静かでいゝわと子無きを羨まれ
寒う見るものは女の酔ひ姿
商談の筈へ妓が続いて來
曇天の様な人だが夫です
悩ましい香りがうしろから着せる
取つつきの悪い人よと惚れて居り
左り前おんな心を知らされる
藝や顔丈けで流行ると思つてて
お仕度が出來たと女將眼で笑ひ
槍錆が踊れる頃は左り前
喜びと悲しみ共に花屋出る

大牟田市　高田抱逸

後進に道を拓けと讃にされ
俺位馘る程会社困つとり

ホノル、市　市岡曉舟

あの顔で良くも言へたりCome see me.
樂園の一皮はげば失業苦

ホノル、市　白砂旋風

貞操も昔は死にも價がし
心掛ければ資本家になれるのに
又もスト自分自身も又困り
信心の力テコでも動かざり
心はネ大きく持ちなと世界地図

大阪市　市場沒食子

ボーナスを半分残し女氣の
戰前からつゞくあなたのノーハット

転任す

長ひとりだけの回轉椅子の部屋
四ッ玉のそろばん出され置き違え

大阪市　須崎豆秋

立候補僕は柔道五段です
たまさかに儲けるとすぐ胃をいため
原爆よむかしばなしになつてくれ
三人が小便をしてわかれたり

大阪市　正本水客

電柱のかげから末の子がのぞき
話好きラヂオを切つてから話し
貧乏くさい話を妻と笑ろてする
十年前の礼を云われて恐縮し
一日中時計が鳴つたのを知らず

大阪市　丸尾潮花

手をひけば影もあまへてゐる月夜
お茶屋から傘が届いてゐる桟敷
金で済む恋婦人科を儲けさせ
夕焼へひとり人待つ娘が残り
星あかりさへ氣にかゝるひとをつれ
一夏でハンドバックのめつきはげ
たんすの古さおふくろの年思う
四面楚歌妻の理解が有難し
行儀見習クリーム位匂はせて

大阪市　北川春巣

奈良県　尾崎方正

夕立へ草は愈々綠にて
雨こやみ一人走れば又走り
氣は心まけときますと五円臭れ
痢の立つことばかりなり暑氣当り

岡山県　浜田久米雄

さんまだぶりだやつぱり痩せるものはやせ
人間どもがわいわい云うて汽車走る
三日臥ておれば三日のひげがのび
散髪をしておでん屋の灯をおもい
かつぎ屋は予定どおりのあわてよう

大阪市　武部香林

善人と信じいつしか世に疎き
年老いし墓守家号呼んでくれ
闘わん橋の下にもお茶が沸き
主なり脊にする柱無けれども

大阪市　木下幽玉

家計簿に香奠一けた上にあり
秋待たず男盛りが一人死ぬ
つじつまが合す漫才歌になり
にこりともせず電氣代取りに來る
夏の葬式お義理で來たのがぼやくとこ

さゝやかな店を開く

賣上げでお菜が変る面白さ

鳥取市　中島鉄洲

私のバラック

バラックを蜻蛉スイ〳〵通り抜け
雨風に鳴るトタン屋根吾を圧す
バラックを彩るものに秋の草

阪妻を謳ふ

三等車役夫人に惜き太りよう

出雲市　尾綠之助

遊学中の長男帰省

飲むことも大人になつて差し向ひ
秋央ば橋にもたれてゐる二人
久方に会えば何とか教に入り
信心の家業を捨てた衣服で來

出雲電通管理所鍵工

新廳舍所長の意志のように建ち

下関市　弘津柳慶

近火、火の子我が家へ

舞ひ下りる

上づつた声で叱つている近火
末つ子は近火少しも慌てない
代議士候補近火見舞も心得る

兵庫県　小西無鬼

冗談にもバラ〳〵にするとおどかされ
パチンコで摺るよりましと飲み続け

尾崎市　小林文月

アベックで歩きし徑を独り行き
マスコットきりりと舞つてバス曲り

札幌市　山根白星

女性欄すべて許して居るのなり
この花の散るころ死ぬと少女病み
フラッシュを浴びタラップへ時の人
舶來をいじり娘の動かざり
出戻りをむしろせつながるは母
身の上を訊けば爪彈くばかりなり

大阪市　渡辺孫拙

咳ばらい妙なサインを兒は送り
食慾のないのを医者に言いわすれ

大阪市　富岡淡舟

身投げをば哀れと月もゆがんでた

筆不精今年も欠礼申し上げ
夏休み父の晝寢の部屋もなし
早起きのどこで撞くのか鐘を聞き
田舍から來たので清水五度目なり
頃はよし横から憎い口をきき
首切つた口で妓を口説いてた
つら〳〵思うに金の要る事ばかり
お茶漬が恋しうなつて暇乞
上司の手落許せぬ氣性です

奈良県　飯降白香

自衛権誇示して高く虫はなき

山口県　長野井蛙

孝行を説くその人に親がなく
勘定書ビールは女がみんなのみ
大掃除手傳ひましようは飲み仲間
東京に住んで選挙にだけ戻り
一票を釣る公約の猛々し

大阪市　麻生梨里

星月夜ベニスの夢を見てねむろ
秋晴だ金の話はやめましよう
猫を見てごらんよ指輪欲しがらす
婦徳をば説いて女に馬鹿にされ
恋愛の遺物ダンスがうまくなり

大阪市　上田春柳

だまつてあるけば大阪暑いこと
平穏な二百十日に立つ案山子

大阪市　松江梅里

嬶曳が靜かになれば虫が鳴く
酔ざめの水持つてくる長襦袢

ひきがえるの様に解除が穴から出
ひきがえるマドロスパイプが似合いそう
ひきがえるいつか德球に会いそうな
ひきがえる棒でつゝけば一つ飛び
晩飯に蟇が出たのも報告し

岡山県　丸山弓削平

今に見てろとパン〳〵で稼ぎ
ライバルへ弱味は十も年が上
男嫌いが女嫌いと恋に落ち
愛情のアンバランスへ嵐が來
嬶曳へチト早いので残業し
娘三人囀り疲れた様に座し

岡山県　直原七面山

労基法違反してそな蟻の列
寢かへれば壁の高さよ秋一人
血色のよい候補者に拜まれる
物忘れよいのを政治家肌と言う
吹聲も女もボイと捨てられた
親切な巡査に白痴つきまとい
もうこれでしまいと雨だれ日に光り

大阪市　西森花村

醉うた眼へ山田五十鈴に似た仲居
再軍備反対左派でない僕も
恋人へ窓から聽かすハーモニカ

鳥取市　河村日満子

女房も左手程は役に立ち
理想選挙そんな言葉もおましたな
名月へ元海軍の腕で漕ぎ
成り過ぎて牛もなすびを貰うなり
時間励行自分一人のシャンデリヤ

兵庫県　家沢莽花

本妻が二号をわが娘の様に連れ
若死にの友は木馬が上手かつた

岡山市　藤本満年

かけはじめ老眼鏡のこそばゆし
ヒットラー張りに候補者手を振りぬ
税金に不平をいうて家を建て
安兵衞のような襷で叩き賣り
停年のない小使が羨やまれ

熊本県　西口如川

それが人生などゝ不平を反らされる
童心への魅力まつ赤な彼岸花

岡山県　福島鉄兒

あんただけ醉うて一休どうする氣
オールドミスヒスにも似たる日もありて
婦人科の無妻と聞いて行きそびれ
そも物を尋ねる腰になつて居す
世帶持つ話へ男横を向き
背見せて迄の哀願押し帰し

岡山県　直原湖月

打算的な女愛情を小出しにし
とぎ水に明日の幸をば祈りつゝ
若い母ボートのオール取つて呉れ

大阪市　福本翮骨

シグナルが嵐の中に生きてゐた
酒くさきにんげんのいき正信偽
偏屈な瞳にもレールの冷たき日

兵庫県　榎南夏六

どうにでもなれとはわびし四十過ぎ
スタンドへ秋の頁の音をさせ
女事務いつから役得おぼえしや
聞いてはやらない僕の眼を見ないから

大阪市　西いわを

二十年暮し一人の子も出來す
終迄言わせず向きを替え給ひ

岡山県　家本富至

白壁の家で闇家のからかわれ
律義者氣永な子供にして了ひ
四五遍は亭主もかえて人氣者

岡山市　服部十九平

廣告のネオンが派手に避姙藥
残り少ない髪を麓の方で分け
銀行を用ないものに見て通り

岡山県　大森娛句樂

落ちるもの音皆秋を淋しうし
あの藥效目なかつたのが笑い
踊が出來る仲居に氣が轉じ

尼崎市　長谷川三司

弓削の川柳大会に行きて
浴衣着て鮎のはなしの鮎の膳
苦労したはずを男にだまされる
ドブ酒へ豆腐はかけたまゝ残り

兵庫県　若林草右

絲拭いた残りの方からたべさゝれ

診察場にて

大阪市　足立春雄

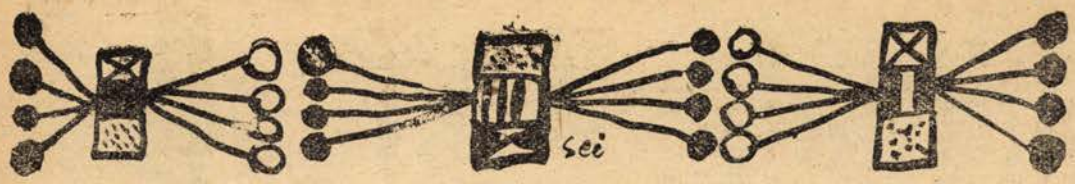
返事一つ一人で出來ぬ夫婦で居
入院に面会時間確める

熊本県　有働芳仙

錄音にのるとは知らずホトトギス
山の恋花は男がとつてやり

香川県　大西迷窓

故郷への轉任断る術がなく



轉任と言へば女房の泣き笑い
米が二度穫れる自慢の轉任地
下関市　石川侃流

菊人形まだもてそうな水を打ち
菊の鉢そのまゝ写すみがき縁
コスモスが乱れ避病院ひまになり
人情に動いて貯金まだ出來ず
雨が降ろうと失業保険の支拂日
広島県　山田季賛

ロマンスカー涼しい海辺をSカーブ
借金は別だと子にも三輪車
船世帶こゝにも希望あるくらし
外米の貨車の隣へ早場米
應接を鉛筆削りつゝ話
玉野市　中村ただみ

台風へさすが借金取りは來ず
保護者殿なんて手紙はもう要らず
共学へ女教師神経すり減らし
一票の力を妻は持てあまし
大阪市　山本葉光

結婚をしてと仮定の話する
大阪市　東喜久堂

食いかねて居るとは知らず泊り客
小さい子が隣りへ乘つて落ち着かず
こんな所にと言う所に居る二人
倉敷市　木村千容

革鞄用意して來る盆の僧
六十五安易に暮す日日に馴れ
張合がないとて老妻はひるをぬき
も一押して欲しいのを投げちやつた
岡山県　田垣方大

過失ある過去は夫の云うがまゝ
妾宅をうまくさばいて庶務課長
シュミーズになれば玄関のベルが鳴り
貸ボートペンキの剝げた稼ぎぶり
秋風が元の漁村にしてくれた
老技師の言分だけは聞いてやり
結婚をして姉さんのけちんぼう
石川県　那谷光郎

相談がある迄其智慧しまつとき
老社員クタビレ椅子に何思ふ
女とはヒューズが飛んでも御存じない
腐つても鯛よ賣れねば嫁かぬまで
羞恥の殼どこで脱いだか家出の娘
大阪市　木村水堂

もう一度戰さする氣の解除組
御用聞き養子と知らぬ世辞を云い
おとなしく別れて女物足らず
熊本市　花岡英子

派手な娘のパパの会社はつぶれそう
默つてればよかつた悔も女の氣
貧相といわれるだけの過去をもち
堺市　八木摩天郎

借りに來た方へも廻る煽風機
税務署も同情したを自慢にし
計画課他人の土地へ線を引き
過去未來互に紅茶かき廻し
再軍備の論へラジオは尋ね人
高槻市　福田丁路

不甲斐なき夫ながらも顔を立て
天の橋立にて
一泊が二泊になつた良い景色
顧みて恥なき身とは笑わせる
情事は兎に角裏切者となり
岡山県　水谷谷水

マスターは変りマダムはちやんと居り
あんなこと云はれて怒らんのが臭し
女教師にあんな勇氣のある化粧
岡山県　梶原一善

金策に來たに恭盤を持ち出され
手土産の菓子を恐縮してよばれ
保険屋の根氣が内の人にほし
新妻の末恐ろしい買いつぶり
岡山県　岡田夜潮

大臣が何度替わろが義手は義手
みつともない子を保険屋が褒めそやし
岡山県　坂井三葉

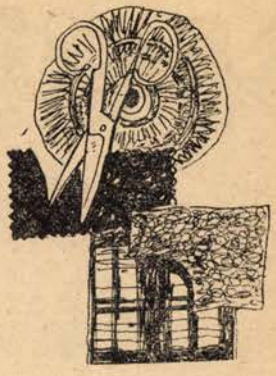
警棒え煽てた方が先に逃げ
ラストシーン扇子をとめたまゝで見る
香川県　中山中納言

貴様等はどけ予備隊の通る路
ハンドルを握る手彼女の手も握る
名刺だけ三等重役見得を切り
香川県　安倍寛子

酔ざめの水女房の有難味
開店の日おみぐは吉とあり
大阪府　青柳扇子仙

怒らない心の強さふと思い
牛に似て多く語らぬ柔和な眼
言いやすくおこない難い嘘たのし
妥協するはなしだるまの絵がかかり
岡山県　岡村牛耕

親の身になればまだまだ助ける氣
まあいゝやそのうち嫁く氣になるだろう
父ちやんの落書もある辞書貰い



川柳大學（V）

―川柳の体系―

福田山雨楼

▽今日は川柳と学問の関係についてお話下さい。

○これは大変重要なことである。兎角川柳人は川柳を作りさえすればよい、一句でも多く活字になればよいと安易な態度になり易い。そして作句に行詰るとその打開に苦心することなく、中絶したり放棄する例が少くない。これらは何れも川柳の基礎的知識、本質的研究の不足から、川柳人としての素養に乏しく底の浅いことに因るのである。秀句は川柳の生命で作句創作元より必要であるが、作句と同時にその基礎を涵養することを忘れてはならない。この意味で川柳の学問的研究、系統的検討を促進することは、篤学者は勿論一般川柳人にとつても必須の要請であらねばならぬ。

わが川柳雑誌社では昭和十五年九月十五日皇紀二六〇〇年奉祝、創刊二〇〇号を記念して、大阪三越のホールで「川柳とは？の会」を催し、詠史川柳と時事吟、題詠吟と雑吟、戰線川柳と作句のコツ、川柳詩論と作家の態度、川柳のこころ、句会の縦断面（実演）、初代川柳と柳樽、古川柳研究の仕方、川柳の形態と用語等について、大家、中堅の巨豪陣営のもとにその蘊蓄を披瀝し、三百数十名の聽衆に多大の感銘を與えたことがあるが、非常に意義深い企画であつた。また本誌は創刊以來その編集方針として、研究発表のため一般に公開し或は評論感想の投稿に誌面を提供する等、川柳の学問化に直接間接寄與して來たのであるが、就中武玉川研究の輪講は規模内容共に画期的のものであつて、昭和七年六月号から同十八年十二月号まで、前後十一年七ケ月間に亘り連載され、初篇から五篇の半ばまで実に三一二四句の多きに達している。これに心血をそそがれた三先生、即ち江戸の碩学と敬称された梅本秋農屋翁（別号塵山、当年九十一才）、古句に造詣深く博覽强記並びなき篤学の蛭子省二氏、今は故人となられ其の英才と博識を謳われた工学士森東魚氏、及びこの研究の主唱と完成に盡力された路郎先生の四大家名コンビによる不朽の業績は、必ずや後世史家の絶讃を博するであろう。このようにしてわが「川柳雑誌」は川柳の社会化を標榜して立ち、併せて川柳の学問化に貢献を続けて來たことは、柳壇の期待と重視を招く所以であると云えよう。

▽具体的に川柳の系統的組織、体系について説明して下さい。

○基礎医学が解剖学、生理学、衞生学に分れ、分科として人体の構造、細胞、組織、器官、系統があり、更に相協力する各種系統（骨格、筋、消化、循還、呼吸、泌尿、皮膚、神経、感覚及び内分泌）が整然たる有機体をなしているように、川柳にも一連の基礎的な系統的組織があり体系をなしているのである。今その大体について概説すると、第一は史観であつて連歌俳諧の起源から、前句附の発生、俳諧の附句及び雑俳の流行、万句合及び柳樽の板行、古川柳の本質及点者の態度に及び、更に細分して武玉川、柳多留並にこれに類似する俳諧ケイ、眉斧目録、童の的、一枝筌、金砂子、不断楼、遡つて春秋関、替独樂、唉や此花などの研究を必要とする。第二は川柳本質の解明であつて、本質的概論から内容、形式、韻律

投句は斯うして

はじめて投句した人達は自分の句が抜けるか抜けないかと云う事に非常な関心を持つものである。ところが全没となつた場合、其の抜けなかつた原因を単に句が拙づかつたから抜けなかつたのであると諦めてしまうことはいささか早計である。と云う訳は、折角投句した作品が投句所へ届いていない場合もある。投句所までは届いても、選者の手許へ廻らない場合もある。たとえ選者の手許へ届いたとしても文字の不明瞭なために没になる場合もあるので、始めて投句する人達は投句の仕方について知つておく必要がある。

投句と云つても、新聞柳壇の場合と、専門柳誌の場合との二つに区別することが出来る。一般雑誌の柳壇やラジオ柳壇などは新聞柳壇に準じて投句すればよい。

（一）新聞柳壇の場合

先ず募集規定をよく読み、規定を厳守することである。それから課題をよく研究すること、課題以外の句は書かぬこと、課題句以外に選者に対して哀願的文句を書いたり、句の註釈などをダラ／＼と書いたりしないこと。文字は出来るだけ鮮明に書くこと。鉛筆書きは不可、書き馴れている住所氏名

用語、文法、古川柳の味、三要素、川柳性、滑稽諷刺、新興川柳、詩川柳等の探求に及ぶ。第三は柳論、柳書の解説であつて、劍花坊、久良伎、角恋坊、路郎、三太郎、雀郎、半文銭、五呂八、水府、塊人ら諸氏をはじめ数多くの名論卓説の解説評釈、前掲史観の部にあげた武玉川、柳多留をはじめ諸種の句集、撰集の解題、柳雨、三面子、卯木、三椒、幻怪坊、花月、劍花坊、久良伎ら故人並に現代篤学者の手になる著名柳書及び研究発表の味解考察が必要である。第四は現代柳壇の回顧と展望であつて、主要結社、機関誌の主張及び著名川柳人の動向研究、故人の評傳追憶、結社分派及び離合集散並に著名柳誌の興廃、新聞柳壇、川柳人國記、現代作家論、閨秀作家論川柳界行事の批判などに及ぶ、第五は特殊研究であつて、川柳と狂句、末摘花、漫画、俳句との関係をはじめ芝居、映画、能樂、食物、酒、行事、名所、花街、スポーツ、政治経済、思想、戰争、時事、詠史、医藥、都市と田園、職業、子供、女性、飜訳川柳、外來語などとの関係から、句会及吟行の在り方、教科書に現われた川柳、色紙、短冊、半折の揮毫などについて研究を要する。

医学は基礎と臨床に分れているが、作法と鑑賞は正に川柳の臨床講座に当るであろう。先ず作法の部では敍法と格調、句語、常套語、連用止め、てにおは、口語体、破調、字余り、自由律、連作、自然美と藝術美、主観句と客観句、句の迫力、生命ある句、課題吟と雜吟、写生吟、川柳の穿ち、個性と独創味、類句と着想、技巧と推敲、プロ川柳、花柳吟、肉体川柳、心理派、人間派、慶弔吟、懸賞川柳、角力吟、添削実例などに及ぶ。次に鑑賞の部では武玉川の味い方、万句合と高番、中番、末番句について、古川柳名句評釈、新川柳名句評釈（明治、大正、昭和）狂句及び難解句の検討、先覚者及び名作家の代表句、新興川柳の特色、詩川柳と孤高派、人情味と警世吟、句評と輪講、互選と清記選、天地人制と統一選、選者及び選句、通卷と点取争い、披講の仕方、句会の雰囲氣、特選句集と自選句集、年刊句集と名句集、名句番付、個人句集と遺句集等をあげることができる。昭和十三年の頃前田雀郎氏鑑修の「川柳講座」は「本講座を得て川柳ははじめて学問化されるのである」との抱負を持ち、当時柳壇の第一線に活躍されつつあつた大家、重鎮を網羅して執筆を乞い、全六卷の構想を以て第二卷まで出版されたのであるが、壯図空しく中断の止むなきに至つたことは惜みても尙余りある遺憾事であつた。

▽それではどうしたら川柳の学問化が促進され確立されるでしようか。

〇一口に川柳の学問化といつてもその専門分野は上述のように廣汎なものであるから、先ずそれぞれの分科において造詣の深い、学識或は経驗の豊かな人を得なければならない、その意味から三面子博士をはじめ穎原退藏博士、水木眞弓教授、古句研究家森東魚氏などの逝去は川柳学界のため、まことに痛惜哀悼に堪えぬところであつた。しかし古句研究家では梅本塵山、蛭子省二、田中辰二、母袋未知庵、綿谷摩耶火氏らをはじめ、幾多篤学の士が健在であり、老大家〇丸、路郎、周魚、三太郎、紋太、水府、雀郎氏らをはじめ、全國に亘り巨豪重鎭、中堅新進の群雄が控え日夜知見を磨いているので、敢て人物に不足を來すおそれはない。要はこれらの人人の知能識見を存分に発揮され、一般川柳人といわず社会人がそれを充分に受容するような組織、体制、雰囲氣を作り出すにある。これが具体策としておよそ次のような事柄が考えられる。

第一は川柳学会の設立である。学会の仕事は川柳図書館を兼ねたようなもので、古川柳に関する図書（写本或は写眞版でもよい）をはじめあらゆる柳書を蒐集備付。柳誌のバックナンバーを取揃え発行の都度寄贈を受け、主要記事の系統的目録を作成する。春秋二回研究発表会、討論会或は鑑賞会を開催する。五ケ年計画で川柳会館を建設する等の諸事業を経営するもので、経費は会員を募集してその会費及寄付金、借入金で賄う。右の内川柳会館については戰前川柳人協会において事業計画の一に数えられていたし、柳

柳人交歡 新春廣告を募る

是非一トロは！

★一トロ金百円、幾口でも申込まれたい一トロ分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ乞ふ一トロ分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十一月三十日限

★広告料は前金のこと

川柳雜誌社

でも、ハッキリと誰にでも読めるように書くこと。ふざけた名を用いぬこと。住所は郵便の届くよう、番地まで書くこと。何々方の人達は何々方を略さぬこと。これは呈賞の場合特に必要なのである。締切日は投句所への着便を記しているのであるから、締切日ぎりぎりに投函すると、選句に間に合わぬ場合があるので少くとも締切二三日前には着する様に投句することである。そして応募がハガキの場合は別として原稿紙の場合には、他の文句を書かねば開き封に八円の切手を貼付すればよい。これは五種郵便となるので目方百グラムまでの値段である。これだけのことを心得て投句すれば、あとは句のよしあし類句の有無等に

書の蒐集については橋本綠雨氏が多年に亘り継続され、その数三百冊に上る文庫を藏せられていると聞く。また同氏は一再ならず柳書目錄を発行頒布されているのである。一方西島〇丸氏は明治以來の柳書、柳誌その他文献年表を克明に編集され、本誌、きやり、東北川柳、川柳倶樂部等に発表されている。とにかくこの川柳学会設立の事は柳壇のあらゆる人士が糾合團結して、一日も早くその緒について貰いたいものである。第二は柳壇の協力体制を整え、学問的態度を昂揚することである。從來柳壇では孤立主義の傾向が強かつた。結社の一員として少し頭角を現わすと脱退或は分裂行動を起して異を叫ぶ。古典の研究にしても吟社間に連絡統一がなく、寄稿家の御都合主義による場合が多い。研究考証又は論述に際し既往の文献を参照、例証、反駁することが少く、同じ題目を繰返し或は前の卓見に無関心な執筆等改むべき点が尠くないのである。お互いに文献を尊重するよう心掛け、文献要目、解題に努力すべきである。第三は著書、句集等の出版が盛んになるよう、川柳人の読書研究熱と購買力を増進することである。これは独り川柳人に限らず一般社会人にも要請したいことであつて、短歌、俳句に比較して柳書の出版が際立つて少いのは遺憾千万である。前記雀郎氏の川柳講座が完成を見ることができなかつたのも、その原因の大半は川柳人の購買力不足にあつたようである。或は好学精神の薄弱とも云えよう。第四は柳誌の合同促進の事である。この問題について自分は東西において再三声を大にして叫んだのであるが、不幸にして実現せず徒に微力と病弱をかこつ次第である。これは川柳人に結社離反の習性があることから、逆に合流提携を庶幾する無理があるかも知れないが、柳壇全体の向上と進歩を望む上から大乗的統合を熱願して止まないものである。川柳結社の原則と政党樹立の原則とは同日の論ではないかも知れぬが、欧米先進國が二大政党の対立によつて政治の健全な発達を見ている時、日本が小党乱立の愚を重ねているのと同様な現象が、柳壇改革の進路を阻んでいる事実を悲しまざるを得ない。柳壇が保守、革新の両陣営に大きく分れ、それぞれ小異を捨てて大同團結し、その集團力と機動性を利用して学問的方向に拍車をかけるべきである。第五は大学に川柳講座開設の運動を起すことである。熊本大学では田中辰二教授の盡力で既にこの事ありと聞くが、各地の大学においてもこれが実現を期するようにしたいものである。川柳が大学に入ると急速に学問化され研究が促進されることは確実である。そして川柳の基礎学を了えた学生が將來社会に出た場合、直接間接川柳の一般学問化が助長されるであろう。故三面子博士が明大の講師として在任中、如何に多くの学生に対し川柳を鼓吹され好影響を與えられたかは、博士を偲ぶものの常に述懐するところである。川柳人はよろしく十年、二十年先きの事を考えて、川柳の大学運動を起すべきである。

以上川柳の学問化促進方策について所見の一端を述べたのであるが、要之川柳の学問的体系を整え、研究方法の統一を図ることが、川柳の学問化卽ち文学的向上の徑路であり、不可缺の要請であることを深く認識して、自覚あり思慮ある態度のもとに努力すべきだと思う。

不朽洞句帖

麻生路郎

菊植えていても社長は俗に生き
いつからか死後の準備もしてるなり
父の咳節約をせよと云う如し
晩酌にもうワンマンの父ならず
別離の言葉に深酒しなさんな
組見の中の一人が嫁き遲れ

よつて抜けるか、抜けないかと云うことになる。

（二）柳誌の場合

専門の柳誌にしても、応募規定を守ること、文字を鮮明に書くことは新聞柳壇の項で述べたのと同様である。誤字や脱字のないよう、ムヤミにあて字を書かないよう、句意を的確に表現している文字を選ぶよう、疑わしい時には辞書を引いて調べて見るだけの熱心さがなければならない。各題は必ず別紙に認めることである。各題の選者は別人であるから、一方の選者へ全部届けられると、他の題は全没になるおそれがある。たとへその選者から返送されて来ても、時日がかかると選句に間に合わぬ場合もあるので、各題別紙を忘れぬことである。又各題別紙の場合にはそれ〴〵に住所、氏名、雅号を記入する事。各題同封で郵送することは差支えないが、その場合には開封で郵税八円を要する、しかし一行でも通信記事があれば封書で十円切手を貼らねばならぬ。その場合には目方の超過に留意せぬと不足税として規定の倍額を徴収されるので特に注意しなければならぬ。締切日が肇便であることは新聞柳壇などと同様であるから、折角の労作をムダにしないようにしなければならない。次に尤も大切なことは選者当込みの句を作らぬことである。

（S・Z）

偏食

木村水堂

○

私は子供の頃、大閤さんと云われていた。秀吉のように智慧があるからではなく、躰が年齢よりも小さかつたので、そう呼ばれていたのである。だから現在でも標準より下廻つている。

私の生れた裏長屋では、一寸変つたものを拵らえると、向三軒両隣りへ配りたがる。もらつたものを家では兄姉達が、美味しそうに喰べるが、私だけは食わない。

大正も中期ごろでは、零落した士族なんかに世間は気兼ねなどはしない。紀州公の児小姓から、明治政府の近衛騎兵を務めた祖父には、そうした世相が不満で、濱六の「八軒長屋」の様なところに住んでいても、気位だけは高かつた。その祖父が私の偏食をむしろ可愛いがつてくれたのである。我が家の絶対的権力者である祖父の公認であるだけに、両親も私の偏食にはこまつたらしい。祖父が死んだ時は、ときすでにおそく、私の偏食はもうかたまつていた。祖母や姉の死んだ時、線香の匂いが嫌いで一週間ほどパンばかりで過した事がある。

今の私の住んでいるところでは、近所にご不幸があると、一家から男や女が手伝いに行く慣しがある。そして手伝いに来てくれた人に煮〆ものを喰べてもらうのが礼儀になつている。昨年そのお手伝いに私が出て、昼と晩、ご馳走を戴かずに帰つて来た。先方では単なる遠慮と解して、三度も四度も入れ変り立ち替り呼びに来る。その都度さしさわりのないように辞退をすると、しまいには、侮辱して来てくれないのだと感違いされて、それからしばらくのあいだは双方とも不愉快な日がつゞいた苦い経験がある。一度喧嘩さわぎまでゆかないと、理解してもらえない厄介な偏食である。近頃親しい人は、私の偏食を知つて呉れたが、大低の人は、

「すじに、井に、洋食に、刺身に、それから酢のもの一切、川魚一切、まぜめし一切嫌いだんね。」

と云えば、

「へえ……?、そんなら一体何を喰べてはりまんね。」

と呆れた顔をする。霞を食つて生きている人間だと思われてるらしい。

「あんたみたいに、そう好き嫌いがあると、付き合いが増えたらどうしまんねん。」

と賢夫人が何時も案じ顔に云う。うちの奥さんは、私が出世すると思つているらしい。南瓜、うり、茄子、きうりが嫌いで、菜ッ葉か大根の漬物しか喰べない。だから奥さんよりも私の方が、夏は先ず弱る。世間では軍隊に行けばどんな偏食でも、矯正出来ると云われていたが私の場合は例外だつた。トマトを喰べるようになつて復員したのが、それでも一つの収穫だつた。

私にご馳走して下さるご奇特な方があれば、「ぜんざい」ぐらいが先ず無難でしよう。

偏食の父偏食の子を叱り

個性尊重

中島鉄洲

○

一日と五日に行われた二つの選挙、鳥取市一区選挙場投票立会人に任選されて聊迷惑したが一日に三千近い顔と動作を凝視する事で十一時間の軟禁的不自由も案外気易く過した。個性という程の事ではないかも知らぬが投票紙の折り方に四つの型が見受けられた。

A、四角に四つ折り　B、従四つに折る　C、縦八つ折り（Bを更に二つに折る）　D、縦十六折り（Cを二つに短く折る）

左の数字は千人のから得比率である。

A型	五〇	老人(女)に多
B型	七五〇	
C型	一一〇	年少の男女に多
D型	八八	女給タイプに多

以上の内で私を喜ばせてくれた一駒は、母と娘の二人連、先ず娘さんC型で投入母は足が悪いらしく娘さん代つて投入したがそれはA型でそのまゝ投入した。

私はそれを個性の尊重と解した。

★川雑支部の改組と新設

九月二十五日午後六時から本社に於てA地区の川雑各支部の幹事会を開催し、支部の改組並びに新設等を決定し今後の支部活動にそなえることにした。括弧内は幹事。順不同。

川雑梅田支部（水谷鮎美）川雑阿倍野支部（須崎豆秋）川雑鶴町支部（浜畑胡蝶）川雑大鉄局支部（正本水客）川雑天鉄局支部（間島青丹子）川雑池田支部（黒川紫香）川雑堺支部（八木摩天郎）桜島支部（丸尾潮花）川雑淀川支部（武部香林）川雑大和支部（上田翠光）川雑西戎支部（土井文蝶）川雑京都支部（村松夢裡）川雑天王寺支部（富岡淡水）川雑姫路支部（夷一笑）川雑篠山支部（小西無鬼）川雑浜寺病院支部（臨所新三）川雑玉造支部（清水白柳子）川雑交通局病院支部（北川春巣）川雑淀支部（市場没食子）川雑暖支部（阿萬万滴）川雑烏ヶ辻支部（森下愛論）なお市電交助会（新川博也）杏林川柳会（長谷川迷路）南海電鉄川柳会（阿形一杉）角一ゴム川柳会（福本鬪骨）は準支部とした。そして各支部の連絡係としては丸尾潮花氏が当ることになつた。（B地区及びC地区の各支部は次号に発表）

麻生路郎著　水武書房版

好評々

川柳を研究したい人にも好適の書

本書は著者が多年ウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新指導書としては唯一無二のものである。「川柳とはどんなものかから」説き起して収むるところ三十七講、平明で、親切で初心者は本書を繙くことによつて直ちに川柳作句のコツを会得することが出来る。多年川柳している人たちにとつても又好参考書である。敢えて一読を薦む。

B六版　（二一二頁）　定價一〇〇円　送料　十六円

取次御注文は　大阪市住吉島嶋内芳代西五丁目二五　振替口座大阪七五〇五〇　川柳雑誌社

近作柳樽

路郎選

アラモード銀座は銀座巴里は巴里　東京都　松井　清志
お揃ひのエバグレーズで飲むジョッキ　同
夏の陽へ脱ぐものもなき女の背　同
同权がまた出て女酔つてゐる　同
自由とは足の先までルージュして　同
海岸線列車女休のごとうねる　同
物さしの妻の旧姓消えかかり　貝塚市　宮本　甲馬
笑はしておけば娘のような妻　同
今日妻を奥さんなどと呼ぶ氣嫌　同
停留所のそばでのんでる妻の留守　同
下駄箱の大半妻に占められる　同
言葉尻取つて女も負けてゐず　広島県　黒本　芳泉
叔父の若さが半端な意見にし　同
そう云へば内の女房も五黄の寅　同
自惚の男図々しく構へ　同
生き抜こと云へば女は死のと云ふ　同
令嬢かと思たら主人子を背負い　大阪市　石川ひさみ
手袋だ耳輪だ夏のあついこと　同
パン〳〵もしてます黒い子も居ます　同
一号は塗れず二号は派手に塗り　同
三号さんでつかと姪を間違われ　同
ダンサーの姿態獣めき酒場夏　大阪市　永田六竜子
落ちる丈け落ちれば女強いもの　同
恩賜の手今日淋しくもマッチ賣る　同
香水もエチケットと云ふ若さ　同
警棒もしばしは釣え足を止め　同
園史など聞いてゐるのかガムをかみ　呉市　松永四季無
経を読むうしろうちわを意識する　同
扇風機アンマの御世辞きいており　同
開店はうれしい椅子の数に満ち　同
小使は表情もなく取次し　愛媛県　渡辺　曉童
金のない男が話題ひつさらい　同
入場券も買つて貰つたお見送り　同
賃上げへ課長も影で後を押し　同
親程に娘乗氣になつて居す　兵庫県　吉原　紅月
三味線も少しは弾ける人氣者　同
上品そうに食べても芋は芋　同
雑草の踏みつけられて横へ伸び　同
マルクスもよいが佛曲読んでみな　福岡市　岩田十三楼
夕立になりて税務署座り込み　同
泣くを愚痴と叱つた方も涙声　同
写眞屋が追つかけている七五三　大阪市　吾郷　玲人
ドクターが借りて帰つた闘病記　同
銀行へネッカチーフで來る女　同
書見器の本を外せば子の写眞　京都市　村本　香果
クラス会先生の横に坐らされ　同
貝釦やもめの針はすぐに錆び　同
見解の相違黙つて雲を見る　玉野市　渡辺あきら
投げ賣をする頃家のトマト熟れ　同
秋風へ猫の子を捨て淋しがり　同
男三郎なら斬つたであらう豊かさよ　大阪市　眞鍋　一瓢
だまされてみたし死んでも良い程に　同
満たされぬ心言葉にしたい酒　同
結婚の否定まだ〳〵つづきそう　大阪市　伊藤　定美
盆踊り母人垣の外で待ち　同
仔犬にも負けるセパード連れ歩き　同

川柳今月の歴史

（十一月の巻）

主要事件、行事、動勢、人事等

大正十年十一月六日大正川柳創刊十周年記念全国川柳大会を浅草宮戸座前あづまにて開催、出席百二十六名、この大会を境として大正川柳は多数の同志と別れ川柳革新運動に入つた。昭和四年十一月号川柳人へ井上剣花坊は「川柳百七十年史」を執筆、爾後同九年に倒れるまで連載したが完結を見なかつた。同八年十一月十六日ふあうすと川柳社主催、神戸みなと祭記念句会開催、余興に川柳漫談、寸劇、漫劇など多彩であつた。

同九年十一月たまむし吟社は発展的解消川柳雑誌社に合流した。同月横浜貿易川柳会創立貿易新聞に柳壇を設け活躍した。同十二年十一月号川柳人は反戦的の句掲載のため発禁となる。同十五年十一月十一日番傘川柳社主催紀元二六〇〇年奉祝川柳大会を橿原神宮外苑建国会館にて開催、出席二百数十名。

（追補）昭和八年八月二十日静岡で第三回全国川柳交歓大会開催。同十三年九月十八日から約一ヶ月間麻生路郎は鮮満北支蒙疆へ川柳行脚に上る。

主要図書の出版

大正元年十一月（以下何れも十一月につきこれを省略）芳賀矢一校訂「川柳選」袖珍名著文庫第五十編が富山房から。同十二年宮武外骨著「川柳語彙」が半狂堂から。

日傘くる〳〵肩で廻して娘はたのし　茨木市　下山　清潮
庭師いま虫にさされた顔になり　同　同
アベックの歩みは人に突き当り　同　同
老妻が急ぐ姿は泳ぐやう　岡山県　岡田　青果
往診がすんで持病に灸をすえ　同　同
夏物を藏うと云うも一枚だけ　同　同
落ぶれてからも女房は女房なり　津山市　定金白柳子
首切つたのが今度目は首になり　同　同
失恋の痛手かおんなくだをまく　同　同
御大家と云わんばかりに樹が繁り　岡山県　太田　又州
大布團重たい方で風邪を引き　同　同
ナイロンの風呂敷なすがすいて見え　同　同
生き延びてあなどられ又いたわられ　鳴門市　同
いゝ天氣何かゝ足らぬ家に居り　大塚五里棒　同
焦躁が何処まで続く停年期　同　同
何をする女か五十二年型　布　哇　滝　純　香
お隣りに医者が居るのに呼びもせず　同　同
戰争を資本家と言ふ目で眺め　同　同
この者に渡して欲しい避姙藥　大和　高田市　岩垣日本村
候補者の写眞は首でカットされ　同　同
大学を出て労働歌覚えて來　同　同
五年振りおごつてもらうあわれさよ　岡山県　大塚美能留
もらい風呂二人家族え五人行き　同　同
結婚の日取り本人無視される　同　同
何時どこで果てる命か酒を飲む　米子市　勝田　正郎
熱狂にオープンカーの歩み遲々　同　同
銀婚の秋を皆生の湯にひたり　同　同
役人もやはりどさくさには乘じ　今治市　長野　文庫
眞相を葬つて去る依願免　同　同
純潔を失いました相談欄　同　同
賣りに來たように主人が主人がと　岡山市　河田　五風

貸しボート灯へ遠ざかり遠ざかり　同　同
虫の國かと思われる家に住み　同　同
下駄履いた洋服さんはもう持てず　貝塚市　小田　柳叟
帰る氣になつて姑云い負かし　同　同
ライバルが浪に呑まれる空想す　同　同
附添は恋人らしい松葉杖　倉敷市　野田素身郎
間借の身でも晩酌はかゝさない　同　同
好きだつたあの声までが鼻につき　同　同
水車小屋見えて故郷の土を踏む　貝塚市　野中　稔一
癒つたら恋も出來よう臥ています　同　同
貞操をあざける如く曼珠沙華　同　同
前ぶれのある官僚の腹がよめ　赤穂市　川西　去水
煙突へ昇つた迄は強かつた　同　同
吸ひ残り一円程を灰に刺し　同　同
愛されぬ吾が性故に恋を恋ひ　大阪市　永田都詩子
情熱の晶子の歌に酔ふ今宵　同　同
午後三時妻は今頃何してる　同　同
字の書けぬ社長何でもハンコにし　広島市　福岡葉留路
追放も履歴に入れた立候補　同　同
色氣なく藝者かづらを持ち上げる　同　同
この寺も左前なり屋根の草　鳥取市　森本法泉子
解散で重役室はみんな留守　同　同
支店長更迭
廻轉椅子ほこりもともに引継がれ　同　同
鉛筆で走り書きして死を急ぎ　岡山県　岡野風の子
夕立がすんで話は始めから　同　同
夕涼みとなりのうちわ持ちかへり　同　同
何故々々とうるさい子等の知識慾　宮崎市　野口卯之助
俺を見習へと跳躍した蚤が　同　同
先は見てやるとだまして貢がせて　同　同
無口を信用しない程に惚れ　今治市　黒川　秀義

同十三年成見延亀、上床新助共著「英訳川柳名句選」が日刊川柳社から。同十四年南久太郎編「川柳書目録」が公立社から。同年中野三允著「古川柳評訳」が山海堂から、同年西原柳雨著「川柳江戸歌舞伎」が春陽堂から。昭和四年近藤飴ン坊著「新川柳分類一万句」が磯部甲陽堂から。同五年今井卯木著「川柳江戸砂子上」が春陽堂から。同年川上三太郎、矢野錦浪共著「川柳漫画全集5寛政の巻案山子は踊る」が平凡社から。同三年「校訂柳樽三編」同七年「諸国奉納尚輿会（古柳書翻刻第一編）」同八年石田元季、母袋未知庵共編「誹風さく良鯛」以上何れも柳書刊行会から。同九年和田天民子編「非常時の川柳」が川柳倶楽部から。同十年小田夢路編「番傘自選句集」が番傘川柳社から。同年富士野鞍馬著「川柳鞍馬集」が同氏から。同年井上信子著「第二句集蒼空」が柳樽寺川柳会から。同十一年坊野寿山著「新版花山吟寿山調2」が松花から。同年「川柳自鳶句集」が枯露柿吟社から。同十二年岸本竜郎編「皇軍慰問川柳集」が番傘川柳社から。同十三年住田乱耽著「のみのあし音」が樽吟社から。同十五年戸田孤蓬著「川柳二千六百年史」が不朽洞から。同年宮田信一郎編「陸平句集」が川柳ビル社から。同十六年村田周魚著「明窓独語」が川柳きやり吟社から。何れも出版。

主要柳誌の興廢

明治三十八年東京の柳樽寺川柳会から「川柳」創刊。同四十三年九州川柳社から「柳行李」創刊、五号まで出る。同四十四年京都から「衍」創刊。同四十五年中京川柳社から「鱶鉾」創刊、二十周年を経て廃刊す。大正五年山口から「おもだか」創刊。同十年本田溪花坊の手で「絵日傘」

嘘でさへ信じきつてる妻に恥じ　同
辛抱を褒めて無能を口にせず　同
ベビー靴片方落ちてるバス乗り場　東京都　田中　稲水
背廣から魚河岸といふ香ひする　同　同
鷄糞の手でサイダーの栓ぬかれ　玉野市　迫田美婦適
過ちを母の涙で鞭打たれ　同　同
新刊書独立日本と言ふ厚味　大阪市　田山　芳洲
レントゲン写眞ひとのと間違はれ　同　同
動物園替り番んこに肩車　同　同
結納にまだ大安が巾きかせ　同　同
舞台では女形（おやま）家ではこわい父　貝塚市　山田　月舟
焼けてから國宝だつたことがしれ　同　同
終電車男瞞した顔がゆれ　岡山県　森川　東南
二号です氣長に炭をついで待つ　同　同
保險屋に人の生身をきかされる　出雲市　佐藤まさる
シャンだから貰（ば）病氣ばかりする　同　同
パチンコ屋損を覚悟でなどと書き　大阪市　飛藝　春風
ドタン場に來れば女は泣くものか　同　同
女と言う優しさ花を買つてくる　高槻市　手島　一舟
嫁もらふ日の買物へ母もつれ　同　同
計算は合はぬが俺が拂つとこ　大阪府　鈴木　風鈴
一寸ようなればパーマだ服だのと　同　同
療養所村の噂の中に建ち　大阪府　大島　荷村
滞納を何処吹く風と豪勢さ　同　同
内職は何時かパチンコ代に消え　愛知県　岩川　寛虚
貧しくもせめて明るく障子張り　同　同
恋愛の熱意でゆけと師の教へ　京都市　若山　圭草
湯呑みまで香水匂う女秘書　同　同
新柄が一枚ほしい妻若し　岡山県　光好三四詩
君も引揚者かとうまが合い　同　同
口答へまで妻に似て娘の十五

落胆は二年続けて鐘一つ　大和高田市　戸田　悦子
妹と眞違えられる程太り　京都市　同　井上　吉造
出稼ぎと知らず手を振る子と別れ　鳥取市　同　德持晩稻子
先斗町呼んだその妓がアララギ派　岡山県　同　栗正佳目夫
忽然と他人にかえる選挙あと　同　同
代議士の三年振りに知る故郷　大阪市　西川　一舟
新聞に出る程貞女押し通し　同　同
少しでも頼むと里え書く便り　愛媛県　村上　旭童
念を押された雨傘を忘れて來　大和高田市　中谷　卓司
遠慮したのにあつけなく膳を引き　同　同
よろい着た姿眞夏の三ッ揃ひ　大和高田市　野田　勝豊
有る時に返せといつた筈の金　同　同
子の野球負（ま）けて祖母まで氣をおとし　大阪市　戸川　千鶴
ふるさとの山が絵となり唄となり　同　同
愛されて捨子淋しい日が続き　大阪府　森本黒天子
故郷はいゝなあ井爐裡で栗を燒き　同　同
まだ産（う）まれぬ孫に相続させる氣で　岡山県　戸田　嘉一
寡婦一矢報いて淋しい床につき　大阪市　同　竹内花代子
老け過ぎた顔も白髪のよく似合ひ　大阪市　同　中谷葉榮子
急病はシートで艶なくねり様　同　同
かんしやくの捨場をさがす屋台店　出雲市　野村　岬月
搖れて來た旅情和らぐ駅の花　同　同
蟹買うて來たけどこれをどうしましょ　岡山県　小林　夢介
夕立へ女せわしい音をたて　同　同
お化粧もして海に入る十八九　岡山県　國正田吾作
水着程泳げぬ街のお嬢さん
拂えない金に落葉へ眼をおとす
重役である咳拂ひと言ふところ
燗をする間が待てないで毒見とか
煙管にも父の短氣がうかがわれ
泳げんと言わず海より山がすき

創刊、なお「上方」は廃刊して之に加わる。同八年京都から「燭」創刊。同十二年長崎の西柳樽寺から「八幡船」創刊。同年神戸中島柳坊らによつて「羽衣」創刊。同年大阪から「千両箱」創刊。同十三年東京から「寸句春秋」創刊。同十四年京都から「対照」創刊。同年神戸三条東洋鬼らによつて「覆面」創刊。昭和二年大阪木村半文銭によつて「底」創刊。同年安東より「鴨緑江」創刊。同六年京都から「川柳街（第二次）」創刊、前の川柳街、木馬、タイムスを合流す。同年広島から出ていた新興川柳誌「影像」廃刊。同七年宇和島から「鹿の子」創刊。同年京都から「なるたき」創刊。同九年名古屋から出ていた「紫」廃刊。同年祖父江町から「青空」創刊。同年高知から「川柳かつを」創刊。同年大阪から八十一号まで出た「たまむし」廃刊。同十年井上信子らによつて「火箭」創刊。同年東京から「川柳と自由」及び「川柳天馬」創刊。同十二年速水真珠洞を中心に「九州川柳」創刊。同年東京阿部佐保蘭らによつて川柳飜訳研究会から「SHK」創刊。同十三年兵庫住田乱耽らによつて「樽」創刊。同十四年台湾川柳社から「国姓爺」創刊。

（追補）昭和二年六月石川県から「猫柳」創刊。同七年十月大阪から「昭和川柳」創刊。

著名川柳家の他界

藤原弘美（岡山）は大正五年十一月十九日二十五才で逝く、新興川柳を山陽道に伝導した剣門の天才。小川芳翠（番傘同人舟人の兄）は同十五年十一月十二日他界。小林紅泱師（金沢）は同年十二月十六日病死、北陸柳壇に尽した。河盛芦村（大阪麻生葭乃の父）は昭和五年十一月十四日六十

森蔭の流れへ二人の足したし　貝塚市　同
表彰へつぎのあたつた靴が立ち　貝塚市　永吉　喜好
孫抱けばめつきり母も老けて見ゆ　貝塚市　同
飼猫に僕の甘さをもう知られ　貝塚市　小島さぎす
人の性悲しお金に搖さぶられ　貝塚市　同
人生に飽いて晝寢をしています　貝塚市　上坂　朱人
パチンコの店番をする退院し　和歌山　浅川　桑南
深窓に育つた筈のアプレ振り　奈良市　同
うしろから動くなという母の背　絹下　南天
女房のヒスによく似た嵐なり　貝塚市　武安　嘉彦
清遊の積りが矢張り溫泉さ　同　小西　雄々
恋人が來てゝすげなく扱はれ　米子市　同
恋人の來る度罐切借りにくる　石川県　桑山　とよ
香水も汗も匂うて夏の汽車　同　同
掃除夫の眼にもバナナの皮がふえ　岡山市　津田麦太楼
借金で茶室まである家を建て　越智　一水
面白い本有りませんかと倦怠期　今治市　同
仕合の際え先夫の肌の香よ　岡山県　松村　怠坊
失業の目に女房の尊とかり　同　長尾　越鳥
故郷はやはりいゝとこ水の味　岡山県　同
母として子の水遊び見て嬉し　貝塚市　喜久改め美野百合子
パンパンが國際絵卷見せる街　岡山県　同
朝酒が樂に飲めるも汽車の旅　同　多炭　若柳
貢ぐほど貯め女事務嫁ぎおくれ　貝塚市　同
父だけになれば長女もさからわず　鳥取県　日置　文笑
附錄見ながら羊かん出來上り　同　同
交際へ女も負けず派手に飲み
男になれ〳〵と怒濤が呼んでるよ
ぎつちよまでが魅力であつた恋愛期
議事堂で眠つた人とは思われず
眼鏡などかけて変装した氣で居

すぐに酔う酒となりけりやまにて　大阪市　横田　方眠
うつぶんをはらす氣持か猫をけり　愛媛県　同　藤田　博人
弔慰金泣いた昔を忘れかけ　同
病氣かと問はれる晝の和服なり　愛媛県　鳥井　川鳥
再軍備でもバケツには用は無し　同
金は殖えぬが銀行は殖えました　岡山県　井野　格一
勉強の嫌いなとこも親ゆづり　同
家計簿を税務署氣取りで閉いて見　岡山市　宗高八ッ茶
二本目の釘は勝手に間借り打ち　同
立読みの一人になつて居て慌て　岡山県　堀　不漁
玄関だけ張つてやめとく障子張り　同
水火をも厭はぬ筈が先に逃げ　岡山県　繁松　玉露
明日嫁ぐ乳房湯槽でジット見る　同
同じ乳のんでも追ふ身追われる身　堺市　丹波　太路
止むを得ず笑つてやつた兒の笑顔　同
夕立に水つく家と知らず住み　下関市　向田妻楊子
コスモスをそよがせ列車通り過ぎ　同
退院のやつぱり生きて來て嬉し　貝塚市　津田　千舟
何党と聞けば女將は鳩山派　同
正直な者が損する立候補　大阪市　成田壽〻女
鍋と釜買う樂しみも二人だけ　岡山県　藤井　呆声
ギョッだなんて社長ます〳〵若いこと　岡山県　中尾　貞教
病める身に税吏過金を返し來る　島根県　星野　侑正
昨日來た税吏にパチンコ屋で出合ひ　高知市　松下　蘇水
先輩が会釈して行く選挙前　大阪市　西川　惠風
麻雀をやればイキ〳〵目が光り　大阪市　池戸　桃村
ビール飲む話もしてる女事務　大阪府　荒川　勢園
遠慮する間借も樂しい新世帶　児島市　難波　鴻峰
蒔いた種草も取らずに立候補　岡山県　池田　古心
鼻髭の面子にかけた席に座し　高槻市　谷脇土佐兒
質素でも尺度が違う御輿入れ

五才で永眠、関西川柳社創立当時から奮つた人。武智彌生（大阪）は同六年十一月二日自動車事故のため倒る、令兄の手になる遺稿集あり。福武桂華（岡山）は同年十一月二十一日三十五才で病歿、大正川柳の名作家、柳川洲馬（山口）は同年十一月二十七日逝く、川雜の古い同人、小笹楽山は同八年十一月十七日四十二才で他界、京都川柳社の代表者。石森静太（螢ヶ池）は同十年十一月十一日二十七才で片山津心中を遂ぐ、薄命の川柳詩人。枝松規堂（神戸視野発行人）は同十一年十一月八日二十六才で病死。村瀬無折（京都）は同年十一月十二日郷里岐阜で病歿。岡田三面子は同年十一月十三日六十九才葉山で永眠、法博、古句研究の第一人者。矢野錦浪（旧きん坊）は同年十一月十七日四十八才浦和で病歿、谷孫六で有名。浅田紋二郎（金沢百万石同人）は同十二年十一月三日四十六才で卒去。岡本映絲は同年十一月二十九日四十九才で他界、名古屋柳壇の重鎮、鯱鉾を興した。安平陸平、（京都川柳ビル同人）は同十三年十一月三日三十才前後で急逝。橋本華堂（ふあうすと同人）は同年十一月三日四十九才で永眠。武田駄々坊（東京きやり同人）は同年十一月四日三十七才で他界。横山臥竜坊（東京）は同十六年十一月二十六日五十二才で逝く、川柳人で活躍した。金子半酔（富県山氷見川柳会主幹）は同十八年十一月三日七十二才で永眠。

（追補）飯島花月（上田市）は昭和六年七月二十六日六十九才で永眠、江戸軽派古川柳研究家。

又聞きと言つても巡査承知せず　岡山県　森永　天明
痩腕を尙細うして子を育て　岡山県　奥田　呑舟
横丁のこんなとこにも玉の音　京都市　高岡　薫
男手と思えぬ我子の太り様　大阪市　松元　利行
教室の掃除パチンコ玉ありき　金沢市　篠原古戰場
出発へ母玉子燒厚く卷き　京都市　倉田　錦川
寢轉べば何処かで秋刀魚燒く臭い　京都市　東　志郎
我が妻も魔性の一人ぬりたてる　兵庫県　酒井ひかる
薪割れば薪に顏をうたれる日　高知市　岡本　元馬
パチンコ屋詰つた後は何をする　大阪市　中江破天荒
二百ミリ何百億か又流れ　岡山県　國枝　朴仙
おらが駅小さくのせた鉄道図　下関市　今岡　忠朗
妻の留守長女の炊いた膳に座し　和歌山　滝谷　右郎
再軍備心配の子が今朝産まれ　岡山県　佐々部満佐志

父の死へ小さい希望断ち切られ　津山市　田口今日坊
道徳は捨てゝ理論でゆく氣かや　出雲市　久家代仕男
本ばかりこつてやつぱりザル恭也　津山市　菱川　正美
寄宿舍の柵は樂譜と月遲れ　和歌山　岸本　木魚
陳情に考慮は代物欲しいの意　岡山県　古谷　馬洗
あの媚態妻にもあつた蚊張の外　和歌山　那須　好二
あつと言う間もなく女家を建て　鳥取県　武田　粗粒
宴会があるから村議辞められず　岡山県　岡山　薫翠
ここまではつかりたたかが落ち　岡山県　沖　一糸
虫籠を窓辺に吊つて病続け　大阪府　岡崎　白蛾
離婚してから妻は又若うなり　大阪府　難波　櫻天
簡單な漢字も忘れ病ぼけ　大阪府　浜井　眞砂
原爆の子砂遊びさえいじらしく　大阪府　廣沢　桂月
デパートの裏例地味な発送部　京都市　佐久間折草

一路集

休暇

高田抱逸選

たまさかの休暇を苦役へ狩り出され　芳仙
休暇皮肉いつも彼氏と食ひ違ひ　十三楼
生理日と届けて家でミシン踏み　朴山
お隣は不思議の休暇続くなり　夜潮
解禁の鮎へ静養休暇とり　谷水
就職の日迄休暇と笑顏見せ　怠坊
プラン通り行つて休暇は金が要り　美秋
恥しい生理休暇に許可が要り　紅月
休暇とる嘘を知つてる廻椅子　斗志
子のプランこわしたくない休暇とり　文子
首切りへ長期休暇と言つておき　木人
角帽をかぶり休暇を仲仕する　斗志
年末を流して無事な日を送り　春巣
釣りに行く休暇は暗い内に起き　水堂
事務多忙生理休暇かへ是非の論　莽花
病むほかに母の休暇がない生活　葉光
夏休み尊い汗を知らず過ぎ　山雨楼
同じ日に休暇を取つて怪しまれ　七面山
一千里の恋は休暇を取つて逢い　同
夏休み自分の孫の数を知り　満佐志
後悔の少しは残る休暇あけ　太路
女学生躾忘れる夏休暇　重雄
年末の休暇へ嫁を取るに決め　古心
やれ〳〵とあかれて帰へる夏休暇　淳
学生は休暇に生きる術を知り　代仕男
金のない休暇水道目暴に浴び　柳叟
母危篤実は競馬に行く休暇　雄々
秀才の休暇図書館で無口なり　湖月
信頼をされて休暇をようとらず　同
オツパイを飲んで来たかと下宿言ひ　古戰場
社会課を勉強しすぎた夏休暇　十九平
夏休み日課のやうに子を叱り　千流
妻君の熱へ課長も休暇とり　英子
密月の旅へ休暇が短かすぎ　満年
結婚か見合か休暇冷やかされ　葉留路
寝過した其日休暇にして失い　同
中絶のための休暇と誰が知ろ　光郎
それぞれの思出となり休暇明け　芳泉

柳界展望

▼本社十月句会は四日午後六時から下寺町の光明寺で開催した▼大阪逓信病院川柳会は十月十八日午後二時、三階会議室で開催▼千石荘体温川柳会（貝塚市）は十月十九日午後一時からサンルームで開催▼大阪南区医師会文化部杏林川柳会は九月三十日午後七時半から牟田病院で、十月廿一日午後七時半からは珊枝郎居で開催▼川雑阿倍野支部句会は十月廿四日午後六時からアベノ近畿直営地下食堂で開催▼南海電鉄川柳会は十月廿七日午後五時半から親和寮で開催▼川雑岡山支部九月句会は十四日に山陽旅館で開催された▼京都川柳社四十周記念川柳大会は十月五日午前十時から先斗町歌舞練場で各地柳人を迎へ盛大に開催され本社からは白柳子、没食子、夢裡、万的、正間司、青丹子、水客、潮花、社的の諸氏が出席した。以上何れも路郎主幹出席▼川雑詫支部句会（香川県）は十月四日に開催された▼三菱電機青蛙川柳会（伊丹市）は十月六日午後五時半から健保会館で開催▼虫供養万燈会が十月十一、十二日に箕面西江寺で開催され十二日には番傘社が川柳席を設けた▼大交会館文化祭川柳会（大阪市）が十一月三日（文化の日）午後一時から大交会館（境川交叉点下車）で開催され部外の方の参会を歓迎すると、兼題「命」路郎先生選「肚」「風」の選者は未定▼石原青竜刀氏著大陸風物吟「竜沙句帳」が昭和廿七年九月一日に東京都世田谷区太子堂町四三三山河発行所から刊行されたB6版一二七頁頒価二〇〇円、著者石原氏が大陸生活三十

休暇なしボーナスも無い職に生き　都詩子
初めてのキャンプうれしい夏休み　実信
休暇あけ盲腸炎で白い顔　良坊
夏期休暇どころか俺は籤を着る　木魚
久々の休暇へ女用があり　摩天郎
盆踊り休暇の故郷で娘に習い　寛虚
夏休み山よし海よしPTA　田吾作
花嫁の長い休暇は不和のもと　自楽
子沢山慰労休暇にくたびれる　悦子
初めての休暇に迷ふ新家庭　嘉一
先生もアルバイトする夏休暇　呆声
休暇あけ儲うかったかいと尋ね合ひ　恵二朗
宿題を母もてあます夏休み　同
なすな恋休暇熱海で夜を明し　陽炎
ゆつくりと一服つけた公休日　三林坊
洗濯は生理休暇にすると決め　同
アルバイトすればよかった休暇すま　東南
佳不本意に賜暇戦術に吾れも居る　方眠
佳堂々と生理休暇の届けなり　方大
佳藪入りのサンダルはいて娘が帰省　妻楊子
佳夏休み靴みがきして師と出合ひ　輝光
佳日雇に休暇はパンの食いあがり　嶺南
人休暇とは遊ぶことだと敗けた国　山雨楼
地孝行のせめてに墓参休暇とる　葉光
天家中がストリップなり夏休暇　五風
軸整理休暇実は父さん馘になり　同
同待つてました男子に整理休暇出る　芳泉

山

石曾根民郎選

頂上の昼餉はるかに海も見え　実信
山と海老若男女駅の列　良坊
犯人がかくれた山の気味悪さ　木魚
登山靴遺骨と共に届けられ　芳泉
山と海宣伝びらで競つてゐ　一角
山か海未だ決らない涼み台　妻楊子
山の道モンペの児等に見送られ　都詩子
山小屋で唄ふ小唄がこだまして　自楽
角帽へ次ぎ〳〵山ははげて行き　田吾作
ふる里の山へ疲れた女帰る　摩天郎
山彦へ山彦の和す青い空　寛虚
頂上へ来て登山帽数へられ　方大
登山バスきはどい箇所で揺れて見せ　呆声
山一ッ越えた校舎へ赴任する　悦子
アベックで行けば疲れぬ山登り　輝子
山登り無口一番先きになり　斗志
恋人は山の向ふよ蒼い空　幽王
どつちからともなく山登り手を握り　ひかる
奥の院スタンプ押しにだけ登り　莽花
女子軍も交つて低い山と決め　夢介
伝説の山で行者に教へられ　谷水
一票を得んと候補者山に入り　雄々
山の道見え隠れする遍路笠　怠坊
頂上で皆んな水筒空にする　古戦場
山登り水のありかを尋ねられ　嘉一
転落の身を思ひ出の山に立ち　七面山
子の腕に始めてすがる山登り　淳
万歳をさけんで見たい山の上　陽炎
登山日記そこから恋が始まつた　光郎
ピッケルへ帽子を着せて汗を拭き　朴仙
山の恋海の恋など持ち帰り　佳
夏山をポスターで見て街に住み　葉光
裏山にアルプス支度で登つて居　重雄
信心の山また山を登つて来　木人
登山道カーブすなはちきつい風　太路
夏山が仲人したる妻なりき　満佐志
山育ち結極山へ舞ひ戻り　三林坊
山奥に人生きる道の煙立ち　古心
山へ登り海眺めたる若き夢　山雨楼
山のキャンプ亭主料理の腕を見せ　東南
声だけを頼り登山の霧を踏み　代仕男
遭難の山へ若さが又いどみ　英子
山裾の大煙突で村が生き　夜潮
ポスターの山は知らない遭難者　芳仙
何時来ても故郷の山のいゝ形　葉留路
天候を気にしニュースも山便り　とよ
山に来て山彦試す都会の子　十九平
命にもかゝはる山へあそぶなり　一糸
小ぼけな滝で宣伝してる山　柳叟
山寺の釣鐘献納したまゝで　千流
松茸がさもあるように山の縄　牛歩
わが故郷駅から山を二つ越え　方眠
山風へ制服の処女唄ひ出し　紅月
はかなくも山に散つた記事が出る　五風
雨模様見渡す山が近ら見え　嶺南
俗界を離れて或る日山に坐し　湖月
山の木を売つて村政つゝがなし　満年
山寺を辞せんとすれば鐘が鳴り　十三楼
信心はお山の高さ有難く　水堂
山の宿山の神秘を聞かされる　正郎
颯爽と登つたように山を降り　陽々
山の湯の灰かな恋が惜まれる　同
山風にしばしなぶらせ投函し　恵二朗
頂上に近く先頭無口なり　悦子
山にしてから政治論じ合い　葉光
犠牲者をいとしむように霧がこみ　山雨楼
冨士登山金のかゝつた水を飲み　美秋
なにが淋しいのか山ばかり見て　木人
アドルムを飲む山の位置考へる　雄々

年、中国の風物を川柳と俳句に吟詠されたもので異色のある好読物、一読をおすすめする。▼武田八方菜氏が九月廿三日に亡くなられた謹んで悼む（鳥取県気高郡大正村菖蒲、中島信雄様方）▼小島祝平氏は九月七日に額田病院で肝臓ガン手術、翌八日に退院、津山市田町九一の自宅で永眠された。享年四十八、謹んで悼む。氏は堺市出身、津山番傘川柳会を主宰、資性穏健、佳吟に富む作家で、その死が流派を越えていたまれている。十月十日午後五時から自宅で追悼川柳会が催された。▼川上三太郎氏（東京都）は小説公園十一月号に「川柳あれこれ」を執筆された。▼岩垣日本村氏（大和高田市）は九月一日に元気で還暦を迎えられたとのことお欣び申上げる。▼川村花菱氏（東京都）は九月十一日に日本文化放送で「にぎり飯漫談」を放送された。▼田辺由布氏は西宮市今津大東町八九番地へ移転▼堀口祐助氏（東京都）の還暦記念句集「栗の花」が初秋に刊行された（非売品）

源義經（三）

冨士野鞍馬

平家を壇の浦に掃蕩して、宗盛を生捕つて凱旋の義經は、鎌倉の近く腰越まで來たが、頼朝は鎌倉へ入れなかつた。それは逆櫓の爭いから先へ帰つた梶原が讒言したからであつた。

逆櫓の遺恨腰越で押戻し
（タル一二六）

げじ〳〵の毒に義經あてられる
（タル四四）

——梶原の紋は二枚梶の葉でゲジ〳〵のようは見えたので
それが綽名になつていた

そこで義經は腰越の滿福寺で、弁慶に弁疏狀を書かし、頼朝に眞心を披瀝して、大江廣元に取なしをたのんだが、頼朝は返事をしなかつたので、仕方なく引返したことは、日本外史の名文にもなつて、「腰越狀」と称し有名である。これは壽永四年（文治元年）五月二十四日のことであつた。

骨折も腰越きりのみゝつとう
（拾五）

判官も沙汰は無い事気味があり
（タル三）

西海の九郎も水の泡となり
（〃一一九）

西へ引返した義經は、京都守護職と伊予守を兼ね、京都堀川に居た。そしてこの頃から靜と同棲していたようである。その年十月には頼朝追討の院宣を請い受けた。

頼朝は梶原の讒言もあり、「壇の浦の役に太后と舟を同うし、又平虜の女（時忠の娘）を娶る、横恣此の如し」と外史にもあるように義經の非をあげて土佐坊昌俊に命じて堀川の邸を、義經が院宣を受けた日の夜攻めさせたが、却つて昌俊は敗死したのであつた。

堀川で土佐は熊野をだしにする
（タル一一八）

伝授事になるうそを土佐はつき
（〃十五）

土佐坊は月でもたのむ程にかき
（〃二七）

土佐坊は義經に捕えられ、異心のないことを熊野の牛王誓紙に書いたのでこんな句が作られている。

そこで義經は西國へ亡命することに意を決し都落となり、大物浦（尼崎附近）から舟に乘つたが、大暴風に遇い中止した。この時靜は船に乘せられず別離の舞を舞つたとか、知盛の亡靈が出て海を荒したとか、弁慶の祈りで浪が靜まつたとかいうことになつていて、謠曲や芝居の「船弁慶」に作られている。古川柳はそれを詠んでいる。

あの通りだと靜へは浪を見せ
（タル八）

武藏坊やつとおめかを引きはなし
（〃四）

弁慶が居ぬと靜を乘せるとこ
（〃七一）

義經はお好き弁慶きらいなり
（〃五〇）

靜に小声弁慶は野暮だなあ
（〃一一八）

白浪になつて弁慶汗をふき
（拾五）

知盛をしやぼんのやうに祈り消し
（〃）

あゝめづらしやは怖い土佐衛門
（〃）

舞のうち弁慶は出て船の世話
（タル十一）

それから道をかえて吉野落となり、こゝで靜と永のわかれになつた。

兄弟は伊豆と吉野でかくれんぼ
（タル三九）

お姿は花の名所へすてられる
（〃七）

義經は芸者をつれて吉野山
（タル四八）

よしの山芸者を一人捨てた所
（〃二九）

——靜は白拍子であつたので芸者と洒落ている。

だら助をのんで靜は鼾をさけ
（タル三八）

——陀羅助という薬は吉野が本家

吉野山靜に行けとおんわかれ
（タル一三九）

花も目につかぬ九郎の吉野落
（〃一四五）

ところが吉野の山中で、横川の前司覚範に襲われ、継信の弟佐藤忠信の身代り勇戰で覚範を討ち奈良へ向つたのであつた。

義經にしては身重と法師武者
（新タル二六）

忠信は負腹立つように見え
（タル三六）

範どさり覚はぶらりと吉野山
（〃二二）

この吉野落も謠曲や劇になつている。

奈良からまた京都へ戻つた義經は、再び奥州の藤原秀衡にたよることにして、文治二年（一一八六）二月、山伏姿で京都を出立、その途中加賀の安宅の関で、富樫成澄にとがめられ、弁慶の機轉で東大寺再建の勧進と僞称して勧進帳を読みあげ、ようやく安宅を通過したことは、色々に作られ誰にも知られている。

弁慶も安宅で聞けばうそをつき
（武八）

武藏坊あたかもまことらしく読み
（タル三五）

武藏坊安宅を越して舌を出し
（〃五一）

瓶の銀山

大阪市大淀區長柄
西通一丁目四四
山銀硝子株式会社
電話堀江四四七番

五条ではぶたれ安宅でぶちものめし　（〃五九）
山伏になつて安宅でほらを吹き　（〃九八）
とがしめを勧進帳で言ひひらき　（〃三六）

かくして奥州平泉の秀衡のもとに居た義経は、河越重頼の娘綱を妻として、その仲に出來た一子と、衣川の北方高館（タカダチ）の丘に住んで居た。ところでたのむ秀衡はその年亡くなり、三男の三郎忠衡はよく義経を擁護したが、二男泰衡は鎌倉の頼朝に通じ、忠衡を文治四年（一一八八）十二月、泉の館に襲い夫婦共自刄せしめ、翌五年四月には義経を高館に攻めて、衣川の戰となり自殺せしめた。泰衡はまた頼朝に亡され、藤原三代も亡びたのであつた。

武将の元祖弟ばかりつかひ　（タル一三九）
義経はげに源の九郎人　（タル四四）

まことに苦労の多い義経であつた。三十一才を最後としてみちのくの露と消えた。当時の武人のならわしかも知れないが、果敢ない運命であつた。

衣川の戰では弁慶は奮戰して、川の中で立往生をしたと傳えられ、この時弁慶三十七才であつた。

衣川さすが坊主の死に所　（タル三）
土砂の入る往生をする衣川　（〃〃）
弁慶は山で育つて川で果て　（〃三四）
埋れ木は宇治立枯れは衣川　（〃八二）

——埋木は源三位頼政の辞世

義経は自刄に臨み、讒言をした梶原父子を恨み、その父子の首を供えてくれと、兄頼朝にたのんだ書置が有名な「含み状」で、首と共に鎌倉へ送られた。それには文治五年閏四月二十八日とある。

含状ひびあかがりは書かぬ也　（拾六）
佐殿もいたしかゆしのふくみ状　（拾五）（タル二）
義経の首鎌倉でものをいひ　（タル二二）
むつかしい書置をよむ衣川　（〃二一）

一方静は平泉に居る義経を慕い、奥州へ下る途中下野の粟橋で、鎌倉へ送られる義経の首櫃に出会い、その場で斃れて果てた。その時静は二十二才、粟橋在の光了寺に墓がある。

荒事も所作も静はした女　（タル五三）

東海道馬入川の東に白旗明神というのがあり、義経の首が飛んで來たので祀つてあるという傳説があるが、これは鎌倉で実検後此所へ祭つたのかも知れない。一九の狂歌に

首ばかりとんだはなしの残りけり

ほんのことかはしらはたの宮というのがある。

又義経も弁慶も平泉で死なず、北海道へ渡り、蒙古へ行つて義経は英雄成吉思汗、弁慶は勇將速不台となつたという面白い傳説もあるので次のような古川柳がある。

八郎は八反九郎蝦夷錦　（タル九一）
義経のしとね五爪の竜で出来　（タル三六）
大頭冠つて舎弟蝦夷へ落ち　（タル九九）
義経は五爪の竜の陣羽織　（〃一〇五）
昆布かみ〳〵義経は落て行く　（〃八二）
義経へ鮭の昆布巻などを出し　（〃一一三）
判官も馴れて胡砂吹蝦夷ことば　（〃一五四）
前立の竜五爪織る国へ落ち　（〃一三八）

——蝦夷錦は文化文政頃江戸に流行した織物で、その模様の竜は五爪であつた。（普通は三爪）

同舟近詠

解散へさて複雑な万才し　松山市　前田伍健
樂な事ばかりを探し老ける君
お隣の鶏を叱るに手を叩き
運轉手たばこ半分しまい込み　東京都　冨士野鞍馬
お隣の塀をわが家の塀にして
珍客へ今日は便所もともつてる　長野県　高峰柳兒
都会の灯こりて出張戻つて來
パチンコにこつてる髭を哀れまれ　大阪市　橋本緑雨
金でありながら万の札きらわれる
二度写しのフキルム二人だけで笑い　大阪市　麻生葭乃
貧しき家に天壽全うする草よ
疎開地へ浅黄の空を置いて來た
山恋しなどと余裕のある身かや
寢る前の煙草は何を思へとか

川柳雜誌

バックナンバー御入用の方は往復ハガキに御希望の号数記入の上問合されたい

一品料理と生そば
グリル　芝鶴
上六キヤピトル映画館　東三軒目

にきひとり美顔水
奥谷屋天堂

川柳ポスト

―大原諷流會紀行―

藤本満年

川柳ポストと川柳掲示板が町の中心部に出来上つたというニューズは私も大いに耳を傾けざるを得なかつた。

この話は岡山県英田郡大原町の本田恵二朗氏からもたらされたニューズである。

「川柳雑誌」の近作柳樽や川雑岡山支部の会誌で、投句家としての恵二朗氏のお名前は早くから私も知つていた。

ところが今年の正月ごろだつたと思うが、その恵二朗氏から突然お便りをいただいた。それは大原町にも川柳同志が出来たので毎月一回作品を集め、それを私のところへ送るから選評をして送り返えしてくれないかという文面であつた。しかもその封筒に歯科医本田恵二朗のゴム印が捺してあつたので、私ははじめて恵二朗氏が歯医者さんであることを知つた。

川柳普及にお役にたつことであればと思つて私も請われるまゝに選評を引受けることにしたのですが、その後のお便りに、川柳ポスト、川柳掲示板をこしらえたということが書いてあつた。それは珍らしいことだとは思つたものゝ実際に見ていないため実感としてはピーンとこなかつた。

その後、五月の川雑岡山支部の句会へ恵二朗氏が出席、大原の川柳熱向上と川柳ポストや川柳掲示板のくわしい報告があつた。例え実物を見ていないにしても、手に取るようなお話を聞けば実情もよく判つて聞き手一同は強い感動をした様子であつた。

私は残念ながらその日は出張不在で直接そのお話を聞くことは出来なかつたが、当日の出席者から感動した話を聞いて私は非常な興味が湧いてきたのであつた。何んとなく行つて見たくなつた。かねて恵二朗氏から招きをうけていたので、いよ／＼その責を果す気になつたのである。

八月三日私は岡山発午前七時半の鳥取行急行バスに旧婚旅行よろしく茶々と一緒にロマンスカーのシートを占めた。私は大原へ向つたのである。それは甚だ大げさな出発記であるが、実は急行バスで四時間半、岡山県の北海道といわれる大原町への旅は、少しは大げさな出発気分にもなるのである。バスの四時間半は一人旅ではいささか退屈、夫妻同伴の招きをこれ幸いと、いわば退屈しのぎの話相手に、実は旧婚旅行よろしくの仕儀とは相成つたのである。

急行列車で大阪まで四時間という文明の世に、同じ県内ながら急行バスで四時間半とは、およそ地勢も想像がつくことでしよう。山また山、谷また谷、砂じんを巻いてバスは突走る。緑の山は美しい、流れる川の水は清く、田草取りの姿は、白、赤、青と点々色を添えてまこと、絵の如き景色ではあるが、同じ景色の連続では、結局は単調で倦きてくる。

幸い川雑の課題吟は「山」という課題であつたから、山を見て山の句作に耽る。これ即ちヤミをかけたる句に非ずして実感の句である。何回か居眠りもし、何回か雑誌を出して読んでも見た大きな峠深い谷。バスは揺れに揺れて中国山脈へ挑みかゝるのであつた。

恰度正午、私たちは大原町へ着いた。恵二朗氏らに出迎えられて一旦大原高等学校で少憩した。昼食に出た見事な鮎は、こゝの柳人原田三品氏の漁獲によるもので、私はその好意と美味に感謝せずにはいられなかつた。

約束によつて私は大原高校で時局講演を一時間余り行つた。学校はそのころ夏休であつたが、その日はかねて生徒の出校日にしてあつたのである。校長は数学が専門で、文学には縁遠いが、生徒、職員、そして校長自らも川柳文学に親しんで見たいというご意見であつた。

高校の裏道をとぼ／＼と少し登れば、こんもりと茂つた森があつて、そこが大原神社である。句会は、神社の社務所で開かれることになつていて、もう大ぜいの人が集まつているところだつた。大原ではいまゝで有志の間で、川柳の研究は行われていたが、公開の句会はこれが最初であつた。さて何人ぐらい集るか主催の方法としては大いに懸念しているところだつた。

しかし集つた人たちは女性も交えて四十余名、余期以上の盛況であつただけでなく、みなの熱意には私たちも驚ろくほどだつた。集つた人たちは町のあらゆる階層の人たちではあるが、特に郵便局長で報道委員長である有元ごん平、町議会副議長の船曳木々、恵二朗氏の叔父さんに当る中田野川、春名米華、諷流人の春名秋芳、獣医で新聞販売店の原田三品、製パン業の熊見地久平、中学校長小坂田南仙、小学校長の高畑みのる、中学校教頭の岡本利左の諸氏は、恵二朗氏の協力者であり、町の有力者である。恵二朗氏はこの町としてはこれ以上の顔ぶれを集めることは出来ないベストメンバーだと述懐されたが、たしかにそれはそうだろうと想像が出来た。

句会は兼、席題各二題づゝ、私と茶々が二題づゝ受持つて選をしたが、初心者とは思えぬ洗練された句もあり、一同がまた熱心なのには感心したのである。披講の前に一寸私が柳話をしているとき、沛然として雷雨が来り、ために天地は暗く、しばらく私も立往生の形となつたが、いかにも山国らしい光景として印象的だつた。そして多くの人たちは、いまゝで川柳に興味をもちながら、いくぶんは懐疑的だつたが、きようの句会でいよ／＼川柳入門の決意を固めたとの声を聞いて、私もここまで出かけた甲斐があつたという喜びを禁じ得なかつた。

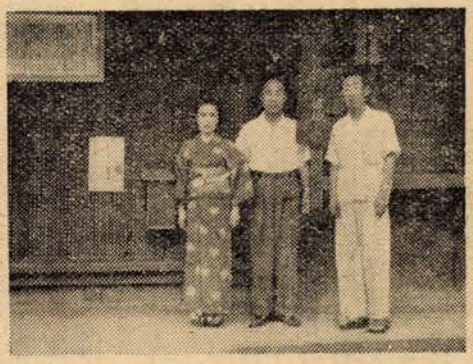
その夜六時から大原中学校の作法室で私たちの歓迎会を有志で開

いていただいた。しかも折角の会を中毒騒ぎでも起しては大変だというので、商売人に調理はさせないとばかりに熊見地久平氏が、楽しみの句会へも出席せず、一日がかりで料理万端を整えていただいたのだから、仇やおろそかでは頂けないほど尊いものだった。句会の最中にあつた雷雨は変電所に落雷して、夜になつても電燈がつかないので、ローソクの灯で、十三夜の月を眺めながら、あたかも百年の知己のように杯をくみ交わすのは楽しい限りであつた。

同夜は恵二朗氏のお宅で一泊することになつた。令兄は町長であり、本田家は名門で旧家である。広々としたお邸へ伺つて、私たちは旅疲れも忘れて伸び〳〵とした気分にひたつた。上品な母堂のしみ〴〵としたおもてなしに一そう心の休まる思いだつた。令兄は町民の衆望を荷つて首長となられた人だけあつて、長者の風格をもつた温厚の紳士であつた。町長夫人、令嬢とも気品の高い、そして親しみ深い、まるで春の如く暖い家庭の雰囲気が感じられた。床の掛軸は旧家の宝物らしい逸品であつたが、私たちはそれよりも、床の水盤に生けられた見事な生花に恍惚として心清まる思いだつた。

恵二朗氏とは午前二時すぎまでも話しこんでなお話し足りなかつた。そこで川柳ポストのいわれもくわしく聞かしてもらつた。恵二朗氏が川柳を通じて町の文化を向上させたいと念願してから、多くの友人知己の賛成を得たが、一般町民に川柳文化を呼びかけるためにはどうしても町民の注目を集めなければならないという結論に達した。

たま〳〵恵二朗氏の叔父さんに当る中田野川氏は長く銀行の支店長として信望の厚い人であつたが、停年退職後は閑雲野鶴の生活に入られ、書画の道、木彫の技などを趣味として深くされているのである。そこで、大原柳人の集句を私が選句、選評してお返ししたものを見事な達筆で大きく書き直し、それを自ら「ミを取つて作つた額縁に入れてお宅の前に掲示されたのである。これが川柳掲示板である。掲示板の下には次の課題を掲示し、その課題によつて創つた作品は、誰にも見せないで、そつとポストに入れる。それがいわゆる川柳ポストである。



この川柳ポストも野川氏が丹精をこらして作つたもので、実物を見なければ、その木目の美しさはわからないが、この写真で見ると茶々の腰のあたりに、昔田舎の局にあつた郵便ポストのように、箱の上部に口のあるものなのである。野川氏のお宅は大原町の中心部にあつて、町の人は通りがかりに必らず川柳掲示板を見る。そしては川柳は面白い。一つ創つて見ようと思う気になつて課題を見る。それから句をひねつて出来た作品はそつとポストに入れるので、最初から誰も恥かしい思いをしなくてすむ。やがて選に入つた作品は掲示されるが、没になれば、もと〳〵誰が投句したのかを知つている人はいないのであるから恥をかく心配はない。まことに諷流な試みであるが、この諷流をそのまゝ、大原諷流会と名づけ、またその諷流会の看板は、水車の古板を削つて野川氏が趣味にあかして作つたものだけに、実に凝つたもので、この写真では、恵二朗氏と私との間にぶら下つているものである。

本田家の裏には吉野川の清流がある。そこはゆるやかな瀬になつてせゝらぎの音が賑やかに聞えている。はじめてこゝに泊る人は瀬音に睡眠を破られるそうであるが、私たちは子守唄のように楽しく夢を結んだ。吉野川には沢山な河鹿がいて、澄んだ河鹿の声が聞えるというので楽しんでいたが、ついに一声も聞かずに終つた。河鹿の鳴き声は恋の声で、八月にもなれば、みなそれ〴〵恋を得て、どこか新婚旅行にも行つたのであろう。私は河鹿の生態を知らないので、その理由が判らず何んとか句にしたいと思つたが句にもならなかつた。

野川氏はもと賈柳という号だつた。それは初心のころ、まだ自分の句は本ものゝ川柳ではなく賈の川柳であるという謙虚な気持からだつた。そして私に雅号をくれないかということだつたので、私は吉野川の吉を除いて、野川をお贈りし、春名米華氏は米華堂と号していたのを堂を除いて米華とされてはというおすゝめをした。

大原町は隣村から宮本武蔵を出している。吉川英治の武蔵には本位田又八という男が登場しているが、経済学博士の本位田詳男氏はこの大原町の出身で、当時本位田博士から吉川英治氏に抗議が行われ、吉川氏は小説の登場人物は実在の人物ではないという回答があつて怠けものの本位田又八は、今日の本位田家の先祖ではないという証明がついて解決したこともある。本位田博士の甥に当る人は、現在大原町から県会議員に出ている。

大原町は鳥取県に三里、兵庫県に一里半という、岡山県の東北隅の町で、昔山陰の大名が三勤交替の通路とした江戸時代の幹線道路に当り、大名のお泊りがあつたためか、町の家構えは皆大きく、可成り大きな城下町でもこれほどの家構えは一寸見当らないほどである。郵便局長有元ごん平氏の邸は以前、宮さまが宿泊されたことのある由緒ある邸宅で、外観だけでも風雅な趣きがうかがえた。

このような環境の中に芽ばえた大原の川柳は、山中の都に咲く白百合の如く、清純で、高い芳香を放つものとなることは当然として、私たちはその健やかな成長と発展を期待してやまない。（写真説明・川柳ポストの前で向つて右から恵二朗、満年、茶々の三氏）

☆ 岡山県人句集吉備団子第四集が刊行された頒価一〇〇円 送費一六円（川柳雑誌社でお取次する）

別荘 旅館
つな家
大阪市南区長堀橋筋二ノ二一
（道頓堀日本橋北詰西側）
電話 ㊥ 7238

いのちある句を創れ

天地人

投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼開催月日及場所記入▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社十月例会（大阪市）

十月四日午後六時　於光明寺

いよ〳〵句作の秋となる。熱心な作家達はまだ明るいうちから句会場へと詰めかけた。例によつて満員の盛会であつた。鮎美氏の句評は潮花、幽玉、妄夢、梨里、花村、喜久堂、水堂の諸氏の句に短評を加え作句態度に就いて述べられた。路郎師の柳話は「柳話とは如何なるものか」「類句の没になる時とならぬ場合」の二項目に就いて述べられた。席題兼題の披講後不朽洞賞優勝カップは村松夢裡氏の手に落ちた。閉会九時。いざよいの月を背にして家路へ——（幹事）

出席者＝路郎・黙平・水堂・一瓢・潮花・ひろし・扇子仙・愛論・春斉・玲人・ゆづる・しげお・紫郎・嘉一・悦子・生々庵・帆加夫・島人・沐天・古方・文蝶・白柳子・成光・万的・水客・淡舟・喜久堂・貴山・夢裡・栞・没食子・春巣・巣澄・雅巣・勝豊・卓児・賢輝・豆秋・梅里・翻骨・天国・恒明・鮎美・三司・いわを・葭乃・梨里

兼題「再軍備」　席生　路郎選

再軍備ぞつとしますと未亡人　黙平
再軍備巣鴨の中も二派になり　三司
少しならいゝわとマ、の再軍備　雅巣
此のネオン又も消えるか再軍備　勝豊
再軍備親子真つ向から唾み　黙平
そんな金誰が出すのか再軍備　白柳子
再軍備また火叩きを作る気か　淡舟
再軍備もう神風は信じまい　翻骨
再軍備しまんのかいなと未亡人　帆加夫
理窟では負けても軍備僕は嫌　ゆづる
恋人をひきさくような再軍備　紫郎
温泉でつち上げたる再軍備　いわを
過ぎし日の夢すて切れず再軍備　恒明
刃こぼれのまゝ再軍備見えを切り　生々庵
再軍備に反対をして票稼ぐ　梅里
再軍備反対将棋指しながら　水客
再軍備わが青春に悔なきや　恒明
孟蘭盆へ仏に聞かす再軍備　三司
再軍備辻政信を選挙させ　へとち
再軍備社長増資を考える　島人
再軍備しなけりゃ食えぬ工場に居　春巣
再軍備うかつに母にきかせまじ　夢裡
再軍備反対だ一人息子持ち　路郎
　須崎

兼題「表具」

もらうたが表装代が高くつき　豆秋選
表具まけになると表具師思へども　白柳子
表具屋に縁ない暮ししています　栞
自画自讃ちょつと表装して見たく　扇子仙
表具など器用にやれる貧乏性　喜久堂
表具代ぐらいでよいと左前　ゆづる
表具屋は明治のまゝの店構え　香林
秋の陽に表具屋白いものばかり　水堂
表装をすれば遺墨は活き返り　万的
竹べらの先国宝を片付ける　玲人
とりあえず表具のよさがお気に入り　天国
酔筆を極上等の表具にし　生々庵
炊きつけにせよと表具屋に断はられ　鮎美
表具する程でもない絵買わされる　愛論
先生表具代の方が高うつきました　春斉
表具した日から恩師の軸とゐる　扇子仙
表具した墨絵に秋の蚊がとまり　潮花
表具にもならず富士山ピンでとめ　文蝶
御真筆と聞いて表具屋かしこまり　夢裡
表装して見なければ表具屋賞めちぎり　玲人
表具屋はもう初日の出掛けてあり　万的
蕪村とは知らなんだはるぼるの表具　貴山
自信ありげに表具屋糊をとき　扇子仙
掛軸をほめて表具の値にふれる　天国
難物が来たと表具屋顔しかめ　生々庵
表具屋の指に素直な紙となり　没食子
表具屋はくしゃみしながら軸を賞め　成光
表具屋に用のない家建ちならび　翻骨
表具師に聞いて売るのが惜しくなり　水堂
表具して見ても偽筆は偽筆なり　淡舟

兼題「口車」　松江選

見続けた夢アホらしいものにされ　豆秋
口車に乗つてばつかりいる男　梅里
口車に乗せて割勘とりに来る　一瓢
口車惚れた弱味がのせられる　喜久堂
口車女の口のやわらかく　ひろし
口車を意識し乍ら酔いつぶれ　水堂
ほんまかいなほんまかいな猪口を受け　夢裡
口車めがねの曇る茶をよばれ　万的
口車しばし香水だけ残り　貴山
口車不作な嫁をつかまされ　水客
口車ふん〳〵ふんと聞いてやり　潮花
故郷まで捨てゝしまつた口車　勝豊
口車もう投票が寄つて来ず　嘉一
たよりないのが口車に乗つて呉れ　生々庵
口車又年甲斐を笑われる　雅巣
口車に乗つたと見せたのは私服　春巣
口車まんまと欺す気で欺し　黙平
許す気の手前で知れた怖ろしさ　三司
口車ビールの泡をつけたまゝ　一瓢
取れるだけ取つて放る気の口車　三司
口車フト本心を見透かされ　潮花
　島人

席題「逆コース」　市場　没食子選

逆コース編輯局の隅に居る　島人
軍国の歌が出てくる逆コース　玲人
逆コース若さがついてゆけぬなり　恒明
逆コース選ぶはわけのあるカメラ　成光
温泉でゆつくりと云う逆コース　貴山
ピクニック逆コースなら空いてゐる　しげを
逆コース養老院に恋の花　ひろし
逆コース丁度峠で会う手管　梅里
落伍者が続き思わぬ逆コース　悦子
逆コースもうフイルムが切れかゝり　古方
案内も勝手の違う逆コース　嘉一
逆コースいみじくも又年に触れ　白柳子
逆コース元参謀も当選し　ゆづる
教え子に教えられてる世のテンポ　沐天
買出しに来て覚えてた逆コース　梅里
逆コース変なお寺で突当り　春斉
道連れも相当にあり逆コース　喜久堂
逆コース滝の唸りに腹がへり　天国
逆コースひよんな所で正午になり　豆秋
逆コース母の意見が身に泌みる　淡舟
思惑がばれてしまつた逆コース　いわを
道しるべ裏から読んで行くコース　白柳子
逆コース行き会う人に名所きく　紫郎
逆コース思わぬ物を見て帰り　悦子
遠足へ予算を組んだ逆コース　嘉一
自信ちとコースを変へた悔なのせ　夢裡

小児科
内科
性病科
安岡醫院
安岡三四郎
道頓堀・日本橋南詰
東へ半丁浜側
電話南㊱三二四六

意地つ張りまた逆コース主張する　しげを
逆コース朝の有馬を見て登り　潮花

席題「骨」　友淵貴山選

意志曲げぬ男の頬骨とがり居り　淡舟
骨箱のこんなに軽いものと知り　三司
何の骨か秋の浜辺へ真つ白く　万的
秋の夜の月硫黄島の骨白く　豆秋
君丈けが骨を拾つて呉れる筈　いわを
政治家の踏台となるあばら骨　一瓢
せめてもの骨拾ふ気の船出する　文蝶
犬曰くなんぼ鯛でも骨はいや　潮花
満員車男の骨の堅いこと　天国
鹵にさゝる小骨妓と昼の酒　鮎美
すだれ背に女は鮎の骨をぬき　潮花
五千年経つても人の骨は骨　帆加夫
骨埋む異郷の空の雲速き　文蝶
骨抱いて白衣今宵も辻に立ち　すゝむ
寝返れば娼婦の骨がボキと鳴る　水客
骨のある奴が居らんと御立腹　恒明
粉骨砕身また税金に追いつかず　生々庵
カリカリと骨食ふ犬が羨まし　ゆづる
骨までおいて沙漠のオーブンセット　古方
骨上げの帰り墓石でけつまづき　春斉
骨折つた事もあつたと今の地位　勝豊
骨納め高野の寺で酒になり　春斉
骨のある男にされて前科者　帆加夫
骨にまでしみる公約守りぬき　紫郎
効きすぎて骨見え出した美容術　悦子
動物園ここは鯨の骨ばかり　扇子仙
木琴に似た肋骨の胸を張り　翼骨
マラソンのトップはのばら骨が見え　島人
骨相が当りきれいな嫁が去に　潮花
鯛の鯛二号の暮しにある不平　水客
骨箱を造る商売とは言えず　扇子仙
落ちぶれた骨を埋めに舞ひ戻り　紫郎
秋風にもう骨体美見せられず　貴山

席題「社交」　石井黙平選

社交家の家で案外無口なり　ゆづる
借金も容易く出来る社交振り　喜久堂
社交でも家でも巾の利く夫人　水堂
社交家と云われる程に役を持ち　悦子
渡米した誇りマダムの社交術　玲人
ゴシップの種をまいたる夜会服　淡舟
社交だけ上手に出来る妻を持ち　紫郎
P・T・A妻は社交の心算で出　ゆづる
家柄を秘めて社交の花と咲き　文蝶
ネクタイの色にも社交振りを見せ　島人
未亡人社交クラブで根を生やし　潮花
社交とはさて腹のへるものと知り　愛論
肩書に物を言はせてゐる社交　恒明
社交性薄く象牙の塔に閉づ　没食子
むつつりと社交の好きな妻と住み　生々庵
社交喫茶となりの嫁にふさ出会い　ひろし
社交家は妻に気兼の日がつづき　紫郎
あれでなかなか社交家の蓄めている　扇子仙
運動会社交の母の果物屋　卓児
社交家の流石に空の旅に馴れ　成光
姐さんのほめる女将の社交ぶり　栞
新妻は初め社交と信じ切り　ゆづる
社交家として爪切を離さない　貴山
社交場凡人遠慮なく笑い　愛論
役得の社交苦しい酒も飲み　没食子
社交室秋の着物は美しい　天国
社交家に今日は和服の用があり　春巣
どこからか金を集めて来た社交　嘉一
ふとした機み社交から線を越え　黙平

雑川　**南支部句會**　（大阪市）

九月廿六日　於近畿地下直営食堂　須崎豆秋報

ザックバランに云ふてしまをか眼をつむり　一香
ザックバラン調子に乗つた　ことを悔い　文蝶
ザックバラン世界はせまいものと知り　小楽園
ザックバラン女のことも打明ける　貞女
も一枚ほしいと思ふ二枚舌　茶三
二枚舌明日は判る嘘でよし　唯義
のれんから歌麿呂えがく顔が出た　潮花
のれんに秋風酒のいゝ匂ひ　天国
嬶曳の靴は難波で磨かせる　春峯
嬶曳の帰り手相を見て貰い　玲人
四十の理性キスだけで別れ　野介
嬶曳の初手は黙つて歩くだけ　恒明
嬶曳のしよんぼり待つている柳　豆秋
嬶曳へ粋をきかした朧月　梅里
ラヂオクイズ時間すれ〳〵答へられ　ひろし
故郷の母へ列車は遅々として　圭三
村のバス時間に来ないものと決め　ゆづる
休憩の時間でアドバルン見てる　梅志
牛を追ふ時間は牛と歩を合せ　日本村
本当の自分の時間持てず死に　晴峯
狂人の衰れ時計の振子をひねもす凝視　亜鈍
愚人に愚を忘れた頃にあひ　義坊
愚人に逢へば保険をすゝめられ　白面人
愚人も金で精算されている　しげお
愚人の嘘へ合槌打つておき　妄夢
愚は愚私夫が御座います　好郎
愚人が運転台に乗ると云う　路郎

雑川　**出雲支部句會**　（出雲市）

九月十七日　於野村岬月居　尼緑之助報

退院の歓喜を締める革バンド　代仕男
酒だけは絶やさず注いで無口な妓　白鵬
ふとある日妻が無言の抗議する　疲蛙
燃える身の無口が悲し秋の雨　牡
倦怠期無口いつそう無口にし　柳水
唇をかんで無口が立上る　岬月
秋ばれをダンスの脚になつて掃き　緑之助
墓石を洗い不孝を詫びている　敬幸

雑川　**岡山支部句會**　（岡山市）

八月十七日　於玉野市渋川海岸　藤本満年報

写真班実力行使を待つている　十九平
愛妻をなぐつて夫淋しがり　七面山
実力はやむを得まいと署長殿　白汀
策戦は実力行使まで進み　玲花
仲裁を当に実力行使に出　一善
税務署の実力トラック持つて来る　ただみ
怠納へ有無を云わさず紙をはり　菅公
みみずばれ実力行使されたらし　蚊一
陣笠はただ腕力をふるうだけ　雷山
賃上げ（サボ、スト、デモ）で攻めてたる　満年
軽はずみ一生悔いる妻を持ち　たか代
一枚の名刺汚職の足がつき　大介
軽はずみ叱つた母も過去を持ち　あきら
又親へ負担がかゝる軽はずみ　茶々
潮風にお尻を向けたコンパクト　怠坊
スタンプも湯気が立つてる旅便り　風来子
あこがれの美空ひばりで壁をうめ　大甲帽
大会の一番乗りが茶を運び　三林坊
三度程一番乗りは席を変え　美婦適
受付を一番乗りが慌てさせ　怠坊

東京そばと
灘一とすじ
アベノ橋地下映画食道街
梅里の店
大萬

★大万川柳（第廿一回）を募る
兼題「おくれ毛」　路郎先生選
締切・十一月十五日　句数五句以内
発表・十一月廿一日（店内に掲示）
御投句は大万宛・どなたでも

川柳雑誌社ハワイ支部 **ウイロー社句會**（ハワイ）

於マノア快夢起居　古川魔花麗報

共稼ぎたんまり貯めているらしい　泉水
孫も又共稼ぎする跡をつぎ　木公
共稼ぎでも矢張り妻は妻　沙兆
共稼ぎおいら免も角プロの群れ　晩翠
共稼ぎ夢を十年先に置き　純香
朗らかな笑ひを明日へ新日本　快夢起
行きすぎた笑顔に妻の目が光る　細民
面白く読んで笑つた子の手紙　拝山
笑ふべき事でもないに女の子　亭駒
笑へない喜劇入歯を置き忘れ　魔花麗
厳格な父が笑顔の無い子にし　保技女
待たされて居るに秘書さの高笑ひ　草一郎
想ひ出し笑ひ剃り後撫でながら　馬喜々
悟つて見れば笑つても暮される　旋風
挨拶のジョークへみんな引づられ　野渉
戦成と冷笑浴びせ持たぬ身の　きさみ女
哄笑に送り出された飲仲間　迷朗

川雑 **下關支部句會**（下関市）

九月七日　於福王寺　石川倪流報

コスモスへ風もなよ〳〵吹いて過ぎ　良坊
コスモスをそよがせ列車通り過ぎ　妻楊子
発展的解消で打開する行づまり　倪流
行きづまり打開女房の智慧も借り　米三
現物が給料で出る行づまり　蘇人
懸涯の作り孔雀の尾を引き　稲穂
大輪を賞めて小菊を貰つて来　半休門
安心をさせて里親汽車に乗せ　九呂平
大臣が生れて村へ線路延び　藤市
盆栽の菊に余命を賭ける父　忠朗
狐つき遂に裁判沙汰となり　周平
何時来るか百舌はバッタを串したまま　ほなみ

川雑 **姫路支部吟行**（姫路市）

於写書山瑞光院　夷一笑報

雞と駄菓子が同居の山の茶屋　一郎
人情も下界とちがう山の上　笑路
山彦が人の気配を感じさせ　和水
思ひ出の山ぼつかりと窓に見え　孤笑
山宿の男料理もあじなもの　二葉
山の中小鳥がなにか云つてゐる　照男
戸締りもいらず悠々山の家　笑鬼
優越感胸一杯の山の上　燕子
ふもとから初発のバスの音がする　一笑

川雑 **弓削支部句會**（岡山県）

八月二日　於丸山弓削平居　福島鉄児報

又幹事飲んだか会費ふえて居り　凡児
折詰の不足幹事はつらい役　牛歩
梯子段上り疲れてゐる幹事　鉄児
金廻りいゝので幹事やらされる　一貫
幹事会芸者の意見を上程し　流児
一通り小言を云わぬとすまぬ父　桃々
一通り看板だけは見て歩き　白頭
一通り云わして置いて押し返し　弓削平
一通り理論は知つて恋ならず　朗笑
一通り聞いて押売追つ払ひ　竹風
一通り開く間仲裁お茶を飲み　古心
一通り恥も話した審判所　久米女
失望へ二号の方が力づけ　奇童
自宅から見てる所へ西瓜植え　鉄児
静養の釣竿秋の空が晴れ　七面山

川雑 **貴生川支部句會**（滋賀県）

八月三十日　於貴生川公民館　黄瀬美秋報

急病の箸の人ゐるビヤホール　水月
急病の知らせバンクのまで乗り　美秋
雨風にたらいバケツのリズムき　てる子
夜嵐に秋の名残の柿もみえ　柳月
外は嵐絶交の手紙を書いている　学
台風へ先づニハトリを避難させ　凡骨
藪入りの子の挨拶も板につき　寿限無
十八才もう挨拶にふしをつけ　斗志
挨拶は抜きでどちらも酒が好き　紅月
秀才と言はれて咳の出る病気　迷羊
一人子の咳小児科でおどかされ　春巣
思ひ出の話に泣かぬ寡婦となり　劣焦
斗病へ素足の白さじつと見る　観月
海水浴母は素足になつただけ　木人
スピードを落して遊覧街を抜け　夢生

川雑 **京都支部句會**（京都市）

九月十六日　於仲源寺　村松夢裡報

探幽の虎がにらむと尼若し　烏雀
病身をよせて襖のぬすみ聞き　迷々
鳴咽しながら考へてゐる　蝶
戦後派の出す小切手に疑惑の目　誠史
どうせ不渡り小切手を派手に書き　好浪
会社解散小切手へズラリ　みてい
くたびれて不渡チェック帰つて来　案生子
ゴム長の之で小切手切る親父　いくを
また待たされる小切手と知る電話　草之助
疑惑ふと小切手に湧く判のづれ　夢裡
白衣もう見返りもせず人は行く　キヨ
速達の小切手日曜日に届き　薫
一枚の小切手が断つ愛情か　豊次
小切手帳持つて暮らせぬ日が続き　干潮
小切手を取つたと電報打つてくる　ゆきら
小切手も交り商売になつて来る　晴芽
小切手の小さな餅妻はもち　牛歩
見られてる意識鳴咽の女の児　紫蘭

川雑 **大聖寺支部句會**（石川県）

九月四日　於桑山とよ居　野村味平報

ダンサーになります親にたてついて　光郎
橋に来て自転車一と風入れて行き　味平
此橋を越せば向うは新市街　桃園
若い妻ある日は処女の如く居る　酔羊
若い妻免角ノートに頼りすぎ　雷木
再軍備なんか嫌だと女同志　とよ

川雑 **浜寺病院支部句會**（大阪府）

膳所　新三報

尾根の道百合一輪を避けて出来　青道心
アペックの登山彼氏に手を引かれ　紫雲
ロッククライミング山のスリルを忘れかね　溪泉
キャンプ村季節も済んで閑古鳥　月餞
鉱山の汽車は序に客を乗せ　漫多朗
山彦が二人の声で返つて来　芳洲
同点となつたところでラジオ切れ　石三
北浜になつてダイヤル廻される　溪泉
晩酌えラジオヤットン節で鳴り　巨松
趣味が違ふ隣のラジオに腹を立て　漫多朗
ダイヤルの電波え商魂戦わせ　真砂
御廻診ラジオも惜しいとこで切り　芳洲
満ち足りてラジオえ向う新世帯　風鈴
聴き物にダイヤル皆んなで奪合ひ　松年
ダイヤルは何処を追つてもコンサート　文茶
フィアンセが登山家で山が好きになり　白蟻
咽喉自慢心臓も出る和やかさ　荷村
産し押えされてもラジオ派手に鳴り　諷士

阪田謄写版

大阪市北区芝田町五二

株式会社 **阪田商会**

電話 福島 五六一九九五
番 三一 四番

不朽洞会から

▼九日廿四日夜、不朽洞で常任理事会、路郎、生々庵、香林、古方、没食子、栗の諸氏出席▼十月三日夜生々庵居で常任理事会▼十月四日午後四時から生々庵居で理事会を開く▼第四土曜に常任理事開催のこと▼築山快夢起氏（ホノル、市）は故村田流水氏（旧不朽洞会員）の企画した海外句集が未完成のまゝになつているのを寒に遺憾とし、ウイロー社同人と相謀り、「やなぎ行李」と題し近く刊行する運びとなつたと朗報を寄せられた▼木村千容氏（倉敷市）は山陽新聞の第三十二回読者文芸川柳の第一席に当選された。ます〳〵健吟を祈る▼亀山晴峯氏（大阪市）は社用で北海道へ出張、九月八日定山溪から「真夜中の倶知安駅に女見ず」の句信を寄せられた▼戸倉普天氏（兵庫県）は九月廿八日から奥様を慰安されるため城崎温泉に遊ばれたが廿九日夜半に電話がかかつて来たので「へそくりでもう一ト晩も泊りたし」と云う奥さんを促して三十日夕刻に帰宅された由▼亀井晟修氏（函館市外）は最近作句に精進されている由▼大森風来子氏（岡山市）は岡大医学部附属の看護学校の修学旅行を引率、十月六日来阪、七日熱海から「新婚の夢もほのぼの生待持ち」の句信を寄せられた▼高田抱渕氏（大牟田市）は九月十三日三井化学を退職され従つて三染川柳会はこの際解消し、改めて新しい川柳会を結成されると▼逸見灯竿氏（岡山県）は哲南中学の修学旅行につきそい十月八日奈良から通信があつた九日京都、十日大阪を見学とのこと▼大倉四案氏（岡山市）は九月二十日に長女康子さんを儲けられた。お欣び申上げる。なお氏は十月八日に広島市霞町広島管区警察学校高等部に入られ単独で当分寮生活をされることになつた▼福田山雨楼氏（横浜市）は新秋と共に病勢好調で元気を取り戻したので安静につとめ物故川柳人の遺墨調べをしていられるとのこと▼服部十九平氏は岡山市津島、県公舎へ転居▼小川恒明居（大阪市）に電話が開通、東住吉区二一八六五番。▼佐野卜占氏（八代市）は九月廿三日に下関へ行き市内見学について半休門氏を煩わしたとのこと、なお十月廿七日には来阪、午後の電車で伊勢へ、廿八日の夜は奈良泊り廿九日夜は京泊り三十日夜帰宅の予定だと別府から通信があつた▼富岡淡舟氏は十月七日宮津から橋立に遊ばれ「袖のぞき天女の舞の姿なり」の句信を寄せられた▼延永忠美氏（岡山市）は勤務先の工事と真向から取組み多忙の由激務中からもよい川柳の生れることを祈つている。▼水谷鮎美、西尾栞、戸田古方の三氏は十月から特別会員に種別を変更され本会のため一段と尽されることになつた。

新会員紹介

十月

岡村牛耕（岡山県）正　千石氏推薦
稲葉鳩花（大阪市）正
下山清潮（茨木市）正
以上　潮花氏推薦

編集局にて

★スッカリ秋になつた。日向を歩いてポカ〳〵とあたたかさを脊にうけるのもうれしい。九月の下旬には岡山県に、十月の初旬には京都に出かけて多くの柳人たちと顔を合わしてうれしい日を過した。★本誌前号は予想以上に好評であつた。働らき甲斐のあつたことをよろこぶ。この上ともに高評をたまわりたい。★本号も表紙は二科の米田三男之介画伯を煩わした。画伯は今秋の二科にも入選されている。★「対談、鮎美・豆秋」は二柳人の持ち味を出した好読物であろう。★福田山雨楼氏の「川柳大学」は本号では川柳の体系を闡明してあますところがない。★富士野鞍馬氏の「源義経」は史的古句の研究にウンチクを傾けられたもので本号で完結である。★藤本満年氏の「川柳ポスト」は藤本夫妻の道のために柳人たちを訪ねた紹介記事で川柳は斯くして土にしみこむ水のようにしみこんでゆくことを実証された一文である。味読されたい。★中島鉄洲氏の「個性尊重」、木村水堂氏の「偏食」共に短文ではあるが川柳味があつて面白いと思う。★夜も長くなつたし、各地柳人からの面白い随筆を期待したい。（路）

▼前号正誤▲

廿五頁二段十四行目娘同志は嫁同志の誤りにつき訂正。六頁二段十五行目は You shut up 同十六行目は Kiss me 同十七行目は You and I 同十八行目は Talk too much 同十九行目は we are Japanese と訂正。

カレンダー
卓上日記
印入手帳
宣傳用に！
御贈答に！
製造 販売
城
堺筋日本橋北詰
城澤商店
大阪市南区長堀橋筋二ノ二一
電話南 ㊀ 7936番

募集

課題吟募集

炬燵（十句）浜田久米雄選
猫（十句）黒川紫香選（十一月廿日締切）
勘定（十句）土井文蝶選
船（十句）築山快夢起選（十二月廿日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月廿日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は何人でも投句が出来る。
▼『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan
B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第七卷　第十一号
定価　半ヶ年概算　四〇円　送料（四円）
一ヶ年概算　二六四円　五二八円
昭和廿七年十月廿五日印刷
昭和廿七年十一月一日発行
（載轉禁）
大阪市住吉区阪内方代西五丁目二五番地
編輯兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉区阪内方代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
振替口座　大阪七五〇五〇

昭和廿二年一月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）　昭和廿七年十月廿五日印刷納本・昭和廿七年十月廿七日発行

THE SENRYU ZASSHI

NO・306

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

生活と文化をむすぶ
マツサカヤ

結婚式場 長生殿 6階
美容・着付から披露宴まで

文化クラブ 7階
藝能の綜合文化センター

松坂会館 7階
施設完備の藝能ホール

お好み食堂 7階
洗練された味覚と風趣

松坂パーク 屋上
日本一の完備した施設

松坂屋
大阪日本橋
電南 1177

もっと速く もっと便利に…
とのご期待に應えて
名古屋ー大阪 特急 2時間55分
名古屋発 八・〇〇 一二・〇〇 一六・〇〇 一八・〇〇
大阪上大発 十・四〇 一二・四〇 一四・四〇 一六・四〇
普通急行はこのほか 60分ごと運轉
近畿日本鉄道

自轉車は
シマノの
3.3.3号

避妊には…
ゼリー剤を!

★蕩ける時間がいらず速効且つ確実で連用しても無害
★注入器で膣部へ送るか、タンポンに塗り御使用を!

サンシーゼリー
山之内
1姫 2太郎 3サンシー

円四料送 圓拾四價定 誌雜柳川 號六〇三第